



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 18 平成21年3月31日

発行 日本山岳会熊本支部

熊本市二本木3丁目3-8(田上方)

TEL (296) 324-1200

印刷 ベストプロセス

支部長随想・・・・・・・・・・・・・・・・	1	登山報告・・・・・・・・・・・・・・・・	18
山のしおり・・・・・・・・・・・・・・・・	3	会員随想・・・・・・・・・・・・・・・・	19
追悼・・・・・・・・・・・・・・・・	4	ドルポ・カンテガ峰俳句日記・・・・・・・・	27
キリマンジャロ登山報告・・・・・・・・	5	会務報告・・・・・・・・・・・・・・・・	36
登山報告・・・・・・・・・・・・・・・・	9	支部規約・・・・・・・・・・・・・・・・	37
日本一周冒険の旅・・・・・・・・	11	会員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・	39

日本山岳会熊本支部の現状とこれからの活動について

支部長(8190) 工 藤 文 昭

今年は2月が暖かく、その月の下旬頃から菜花雨が続いたせいか桜の開花も例年より10日近く早まりました。芭蕉の句に「さまざまの 事思い出す さくらかな」と言うのがありますが、毎年決まって咲く桜には、その折々が人間の節目と重なり、その節目、節目の記憶を心に刻み、人は又、熱い心で新たな旅立ちをするのが大和心の本懐ではないかと思います。そう感じるのも、学校、役所等も4月から新年度がスタートすることに起因しているのかもしれません。

さて、熊本支部の平成20年度の活動も無事に終わり、新たな年度を迎えることになります。今年度は、これまでの事業実績からするとかなり様変わりしました。取り組んだ支部活動も24回に達し、毎月2回平均の実施となりました。これを行うために事務局を中心に担当者の負担は大きなものとなりました。公益法人の見直しが、昨年12月から始まり、日本山岳会も当初は従来通りの公益法人(特別法人)の認定をめざす考えが強かったのですが、特別法人に認定されると、支部予算(活動)の50%以上を公益事業費に使わねばならなくなるし、会計、事務処理の複雑化もあげられます。一方、一般法人となった場合は、現在所有する財産を公益事業に提供しなければならなくなります。その他の道も考えられないことはありませんが、どの選択肢が日本山岳会に相応しいのか、現在本部を中心に検討中です。平成17年度に出された公益法人改革案以降、各支部の公益事業への取り組みも年々増加し、本支部でも意識的に公益的事業に取り組むようになりました。前述した今年度の本支部活動24回の内で、15回は公益的事業に属します。この中でも、昨年から森林管理局から委託を受けた「森林保全巡視員」の活動、会員外の登山愛好家を対象にした海外登山報告会、第1回九州脊梁山地全山縦走登山、2日にわたって行った初心者登山教室、山の写真展(2つの会場で実施)などは、正に本会定款が定める日本山岳会の目的「山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山指導、奨励」の主旨に合致するものだと思います。私は、公益法人の選択がどのような結論になっても、それに関係なく公益的事業は日本山岳会および熊本支部会員の自覚と責任において取り組んでいくべき事業だと思います。これは日本山岳会の存続にも大きく関わる事になると思います。現在の日本山岳会会員数は約5500名、毎年100名前後の減少が見られ、会員の平均年齢も66才にならんとしています。熊本支部も現在会員数(21:3月末現在)45名、会友15名となっていますが、どの支部も同様で、近年若者の入会はほとんどなく、会の先細り感は否めません。その要因には、若者の価値

観、社会全体の変化もあるでしょうが、山岳会側の問題もあるはずです。日本山岳会の歴史、活動やその存在さえ知らない人も増えています。現在第3次登山ブームと言われる登山界の中で、この状況を改善するためには、私たち全会員の登山に関する活動が多く登山愛好者に認識され、山岳会に興味を持つ人を引き込んでいくことだと思います。そのためには熊本支部も、周囲から認められる山岳会を私たちの活動で育てる以外にありません。今年度これだけ多くの事業に取り組めたのも会員の皆様のご協力の賜です。しかし、会員・会友60名を超す中で、事業に参加いただく方は極めて限られてきております。それぞれご都合もおありかと思いますが、体調不良の方以外の方は少なくとも年に数回は万障お繰り合わせの上、支部活動にご参加いただく事が支部の信頼、活性化に寄与することになると思います。多くの事業がきっかけで、今年度は会員4名、会友6名の方が入会いただき有難うございました。これからの支部の原動力として活動いただくことを期待しております。

又、2月からアフリカ・キリマンジャロに遠征しておりました4名の会員全員が登頂という報告も受けました。このような実績が、熊本支部の発展に繋がる事でしょう。

これから更に支部会員各位のご協力を得て、英知を集め、楽しく、そして活力のある熊本支部の創造にご協力をお願いします。



2008年の山のしおり

5421 本 田 誠 也

2008年、私は81歳になった。熊本支部では長老の年齢だと思っていたが、もっと上がいた。池崎浩一さん83歳、永谷誠一さん82歳のお二人である。しかも、お二人とも未だ現役並みの登山を続けており、まさに脱帽である。私が最も畏敬した登山家、今西銀司先生は1985年、84歳のとき日本の山1500山登頂を達成された。1983年、81歳のときは年間55山に登られた。その頃は、冬は南国で九州の山、14山に登られたが、そのうち薩摩半島の8山と、福岡の4山は熊本支部が同行した。左足の腱鞘炎と不自由な視力を押して「昆虫の触角」と称する細い杖をついて歩かれた姿が印象的だった。2008年、同じ年齢になった私も十数年来の膝の疾患に悩まされながら杖をついて細々と歩いている昨今である。

- 1/20 県北、津奈木町の矢城山△Ⅱ586mに登る。※熊本電友アルコ会の例会登山（同行30名）
1/27 上天草市の次郎丸嶽△Ⅱ397m、太郎丸嶽・281mに登る。※熊本支部の例会登山（同行10名）
3/09 熊本支部恒例の「干支の山」で鹿児島県出水市の鼠ヶ岩 552mに登る。（同行11名）
3/27 福岡県星野町石割岳△Ⅲ942mに登る。※熊本電友アルコ会の例会登山（同行38名）
4/27 山都町の日丸山△Ⅲ1341mに登る。九州脊梁前衛の山である。カタクリノ花を見ようと出かけたが、ほんの2、3輪がひっそりと咲いていた。 ※1人だけの山
5/07 霧島の新燃岳△Ⅲ1421mに登る。※熊本電友アルコ会の例会登山（同行38名）長い登りと下りに疲れ果て同行者にサポートされて歩いた。
6/08 菊池市の菊池水源周回コースを歩く。※熊本支部の例会登山（同行11名）
6/27 九重山横断コース（長者原～雨が池越～坊ヶつる～鉾立峠～鍋割坂～くたみ別れ）を歩く。
※熊本電友アルコ会
7/16～19 日光白根山△Ⅱ2578m 逢ノ峠（草津白根山）2110mに登る。※熊本電友アルコ会の例会登山
※熊本電友アルコ会（旧電電公社、NTT 退職者の組織）は私の発案で毎年1回、特別例会を実施している。第1回の富士山に始まり、今回は第17回となる。毎回、深田100名山から選んだ山に登っているが、昨年は韓国の智異山に登った。草津白根山は最高峰の本白根山を目指したが、降雨のため逢の峠で断念した。
8/05 五家荘山地の大金峰△Ⅲ1396mに登る。※熊本電友アルコ会の例会コース踏査（同行4名）攻への下りでルート間違え約2時間のロスタイム
9/12 五家荘山地の大金峰△Ⅲ1396mに登る。※熊本電友アルコ会の例会登山（同行35名）小金峰は断念して1人で下る。途中の山道で猪に遭遇したが、猪が敬遠してくれて無事。
10/11～12 JAC 全国支部懇談会（北九州支部主管）10/11 北九州小倉北区「ニュータカワホテル」で懇談会、全国24支部から195名出席（熊本支部10名）10/12 A班（田上、鶴田、廣永、丸尾、伴、田中）福知山 901m 登山 C班（本田、工藤、門脇、加藤）下関市内を散策後、関門トンネルを歩き、風師山 362mに登る
11/6～7 第24回宮崎ウェストン祭（宮崎県高千穂町三秀台）に参加する。※熊本支部3名（工藤支部長、本田、田上）翌日は、田上さんと二人で、新妻徹さん（前北海道支部長）を熊本空港までお送りする。途中、阿蘇神社、武蔵塚、熊本城に案内し感謝された。※北海道支部の中央分水嶺踏査は、北の起点・稚内から日本最長の1000Kmを歩いている。今回の宮崎ウェストン祭りには北海道から遙々と長谷川支部長はじめ5名が参加された。新妻さんはこの機会に南の終点を歩きたいと先発して佐多岬の突端まで行って来たそうである。「これで気持ちのうえでも中央分水嶺の締めくくりが出来ました」と爽やかな笑顔だった。
11/6～7 大分県玖珠町の万年山（ハヤマ）△Ⅰ 1140m 切株山△Ⅲ686mに登る。 ※熊本電友アルコ会の例会登山
黒猪鹿登山口から登る。玖珠温泉「豊後の里」（泊）翌日は九酔峡、やまなみ牧場を経て帰る。
12/9 天草観海アルプス（牟田峠～二弁当峠）を歩く。※熊本電友アルコ会の例会登山（同行6名）
中嶽・334m 白嶽△Ⅲ 373m 鹿見山△Ⅳ 285m 牟田峠 124m

2005に中央分水嶺踏査を終えてからは、大きな山登り（高峻山岳）はやっていない。いや出来なくなつたと云うべきであろう。山は逃げないと云うけれど、年齢を重ねる毎に登れる山は少なくなつていく。この事を実感している昨今である。

追 悼

大木野徳敏氏（1930～2008）

大木野徳敏（おおきの のりとし）さんは、ながい闘病の末、平成20年8月3日に亡くなられた。享年78歳だったが、私にとっては50数年来の岳友であり、哀惜に堪えない。大木野さんとの出会いは昭和28年暮れ、職場山岳会（電電公社九州管内）設立準備委員の1人として出席された時であった。見上げるような巨躯に圧倒されたが、豪放磊落な見かけに似ず細やかな心遣いも持ち合わせており、以後度々山行を共にするうちに私の良い弟分になってくれた。昭和29年夏の第9北北海道国体（大雪山）には、私と共に熊本県チームの一員として出場した。その帰途、二人で北アルプス裏銀座コース（烏帽子岳～水晶岳～鷲羽岳～槍ヶ岳）を歩いたが、夕刻に槍ヶ岳の肩の小屋に着いたとき西鎌尾根千丈沢の雪渓で滑落事故が発生した。救援にあたった慈恵大槍ヶ岳診療所の人から協力を求められた。遭難者は奈良県の高校生パーティーだったが、高校山岳部OBのリーダーがグリセードの指導中に失敗して滑落し、慌てて雪渓を下った二人の高校生もそのまま行方不明になってしまった。小屋主の穂刈さんは、二重遭難の恐れがあるからと夜間の搜索を止められたが、深夜までかかって高校生の二人を救助することができた。不明のリーダーは翌朝、雪渓末端に倒れているのを私が発見した。大木野さんが診療所と小屋に連絡し、駆けつけた人達と意識不明の遭難者を診療所へ担ぎ上げた。この遭難救助の経緯は、後に大森薫雄氏（元日本山岳会副会長）の著書「雲の上の診療所・慈恵医大槍ヶ岳診療所45年の記録」に詳述されている。このとき救助にあたった診療所の一人が、若き日の長尾悌夫氏（元日本山岳会副会長）であったことは、わたしにとってまことに奇遇であった。救助された高校生の父親が「愚息ら三名が無事帰着できましたのも貴県国体選手の危険を顧みぬ救助作業の賜です」と熊本県教育庁宛に感謝の便りが寄せられたことから新聞記事になり、職場から企業イメージの向上に寄与したとして二人が表彰されるおまけがついた。大木野さんとは永い付き合いだったが、登山以外の略歴については殆ど知らない。病氣療養中マツ子夫人にお尋ねしたが、断片的にしかお聞きすることができなかった。大木野さんは昭和5年1月3日、旧満州国の奉天市で生まれた。大陸で戦争が続いている時期であったが、両親の庇護のもと恵まれた少年期を過ごしたようだ。戦雲急を告げる奉天第二中学校在学中に国難に殉ずるため周囲の反対を押し切って予科練に入隊する。ここで終戦を迎えたが、離散した家族と再会するまでには、ひとり山中を放浪するなど苦難の日々が続いたようだ。戦後、逓信局の工作部に就職するが、遅れていた学業を取り戻すため夜学（定時制高校）に通う頑張り屋であった。ほどなく逓信局に出来た山岳部に入り、登山活動を始める。その後、前記の職場山岳会（九州電電山岳部・後に電電九州山岳会と改称）設立に参画し、以後オールシーズン、オールラウンドの登山活動を開始する。私との最初の山行は山岳会設立直後の昭和29年5月、市房山から国見岳にいたる九州脊梁主脈の縦走（L 本田、P 大木野、竹崎、太田）である。以後は、鷲ヶ峰（阿蘇高岳北面）の岩登り（肥満だったのであまり得意ではなかった）を中心に、北アルプスの春山合宿（白馬岳、杓子岳）冬山合宿（早月尾根から剣岳）など行動の幅を広げていく。昭和35年の第15回熊本国体（阿蘇山）では競技役員を務めた。昭和37年、6名の仲間と「山窓会」を設立してからは、霧立尾根と国見岳を結ぶ縦走登山をはじめ、冬期八ヶ岳主稜縦走や阿蘇檜尾岳北面の岩場開拓などに取り組んだ。昭和53年5月、日本山岳会に入会（会員番号8395）する。一時は熊本支部の常任委員になり総務事務を担当したこともあるが、職場の合理化により、職種の変更や転勤が続き次第に山から遠ざかってゆく。そして退職後は、不本意にも持病（糖尿病）が悪化して入退院を繰り返す生活になる。しかし、今西錦司先生が九州の山に来られたときは、送迎のドライバー役を買って出て感謝されたこともあった。1986年4月、1500山登頂祝賀会にはご案内を受けて私と共に京都ホテルの招宴に出席した。二次会は岩坪五郎夫妻のご自宅に招待されたが、大陸育ちの大木野さんはAACKの人達と歓談して大変ご機嫌だった。思いでは尽きないが、現在の支部会員の中には彼を知らない人の方が多いと思うので、敢えて紹介方々、追悼文を書くことにしました。 …合掌…

（ 本 田 誠 也 ）

キリマンジャロ登頂報告

8411 松 本 莞 爾

2月10日に関西空港から機上の人となった我々は、一路ドバイを経由してエチオピアへと飛んだ。今回の遠征は松本の独りよがり、J A I Cに勤め、今エチオピアに駐在している義弟の誘いに乗り、キリマンジャロの登山を計画したところ、木曾会員、加藤稜子会員、井藤会友、そして昔からの友人で高体連OBの江藤氏がこの企画に乗ってくれた。エチオピアの妹の家に着いて、慌ただしく登山の装備を整理し、あくる日には再び、タンザニアのキリマンジャロ空港へと飛び立った。このキリマンジャロ空港は7年前に開港した新しいローカル空港でキリマンジャロ登山には一番都合のいい所にある。2月12日には、登山口のマラングの町のホテルに宿泊し、ガイドとの交渉も順調にすすむことが出来た。翌日からはいよいよ念願のキリマンジャロへの挑戦が始まる。

今回は登山の仮報告として、登山の経過ともろもろのエピソードを紹介したいと思う。そもそもこの計画が本格化した10月頃、100年に1度の大不況の波が押し寄せていた。世の中は派遣切りや会社の倒産が新聞紙上を賑わせていた。それに反比例するかのように為替の円高が進み、海外への渡航がやりやすくなってきていた。今回はツアー会社の企画には便乗せず、手前味噌の旅行計画を企てた。毎日変わる為替相場を見つめながら計算をしてみると旅費がドンドンと安くなる、例えば関西空港からドバイ経由のキリマンジャロ空港までの往復料金が一人当たり24万円から19万円まで落ちた。これは願ってもない遠征チャンスだと、参加者集めに奔走した。キリマンジャロ登山は、ガイドとポーターそしてコックを付けなければ入山許可がおりない、しかもその費用は5名程度が一番効率がよいと聞いた。運良く声をかけた4名は、すぐさま参加に同意し、本格的な計画とミーティングが続いた。

ツアーコンダクター無しの今回の旅行は言葉の問題で多少の不安があったものの、井藤会員が日常会話程度の英語が出来たお陰で入国や現地での打ち合わせなど、試行錯誤しながら無事、登山の行動へと歩を進めることが出来た。後は「高山病」に対する不安とその後の対応が心配であった。08年の暮れに熊本市の60歳代の女性が「キリマンジャロ」で高山病で亡くなっており、さらに1月にも日本人が同じ高山病で亡くなっている。今回のメンバーで3000m以上の登山経験があるものは4名、江藤隊員だけが経験がない。しかし他の者も必ずしも高山病に強いとは云えない状況であった。

2月11日にエチオピアの妹の家で登山装備の点検とその準備を済ませ12日には再び空路ケニアのナイロビ経由でタンザニアのキリマンジャロ空港へ・・・このキリマンジャロ空港は7年前キリマンジャロ登山口のモシの近くに開港した小さな空港である。ここからは現地の「キボホテル」の運転手が迎えに来てくれ、約1時間で登山口のマラングの部落に入ることが出来た。ホテルで6日間お世話になる「ガイド」と打ち合わせをする。四苦八苦しながら井藤会員の英会話で、無事登山が出来る状況となった。打ち合わせでは我々に同行するガイドとコック、ポータが会わせて16名（チーフガイド1名、アシスタントガイド2名、コック1名ポーター12名）と予定をしていた数より多くなってしまった。ちなみに前もって支払っていた、登山経費（約1人13万円：サファリ経費を含む）とは



別にチップの費用を前もって契約をする（参加者1人当たり200ドル）結構高いチップ代である。これは前もって契約した方が最終日にトラブルが避けられるとのアドバイスからである。

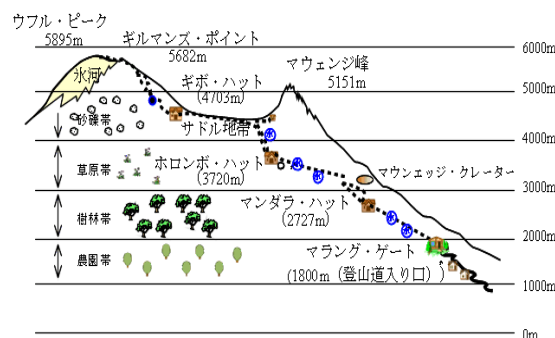
標高1800mのマラングでは入山手続きで多少手間取り、機関銃を持った警備員と写真を撮ったり、外国の登山者との交流も片言の英語で話をする。入山手続きはガイドが総て手配してくれ、いよいよマラングゲートをくぐり、ジャングルの登山路を歩く。ジャングルは以外と明るく、道も広い。我々の荷物を持ったポーターは、急ぎ足でサッサと行ってしまった。我々は、「ポレ・ポレ」（ゆっくり・ゆっくり）の言葉と共に登山開始である。約1時間毎に休憩を取りのんびりとした山登りをする。今回の登山は標高1000mを1日で登り、山小屋泊で踏破する計画である。最終日のキボハットまでは良く整備された、緩やかな登山路を歩くことになるが、多くの外国人（我々も外国人）や荷物を頭に載せ、バランス良く歩くポーター達とすれ違う。「ジャンボー」と挨拶を交わし、お互いの健闘をたたえ合う。日本で云う登山路での挨拶である。第1日目は約6時間の歩行で、1泊目のマンダラハットにたどり着く。ハットとは山小屋のことで、三角屋根のロッジで4～6名の宿泊が出来る。以外と綺麗で衛生的にも問題ない。さすがに2700m迄上がってくると、変な虫も居ない。日本のように湿度が高くなく、非常に心地よいキャンプ場である。キャンプ場の中央には大きいロッジがあり、そこが食事の場所である。荷物の整理をしていると、コックがインスタントではあるがコーヒーを持ってきてくれる、非常にサービスがよい。夕食になると総てコックが準備してくれて、まるで大名旅行の様である。第1日目登山が終わりユックリとした時が流れ、2700mの高地にいる感じが全くしない、それほど寒くはないし、周りは緑が映える森林地帯である。時折「アビシニアコロブス」と言う白い長い毛をもった猿が鳴くのどかな景観である。

登山2日目、ジャングルを抜け、荒涼とした砂漠地帯に入っていく、まだ「キリマンジャロ」勇姿は見えないが、右手正面には、「マウエンジ峰」（5149m）がその荒々しい姿を見せてくる。登山路の脇には日本では見ることが出来ない木々が転々としているが名前がわからない。アルプスのような高山植物を期待していたものの、以外と花々が無い。考えてみれば3000mを越える高地でしかも砂漠である、もちろん動物も鼠と雀みたいなものしかない。乾燥した大地は赤茶けた道路と転々と散らばる小さな草だけである。マンダラハットから約7時間、大きな谷を巻いて尾根に出ると正面に三角屋根のホロンボハット（3780m）が見えてくる。富士山より高いキャンプ地だ。しかし、午後3時でも気温は18度、さすが赤道直下の山だ。ここでも空はあくまでも青く高い、雲一つない快晴のキャンプ場だ、ここはキリマンジャロの上部が見え、右にマウエンジ峰がそびえ立つ雲上の世界である。キリマンジャロからおりてきた人、これから望む人が入り乱れるにぎやかな所である。私たちの前のロッジに日本人のグループがキリマンジャロの登頂を終えて帰ってきた。この人達も昨夜から頂上アタックをし、無事登頂した云う。話を聞くとやはり熟年グループで頑張ったとのこと、我々も、ますます元気が出る。3800mのホロンボハットで高度順応のため2泊する事とし、3日目はマウエンジ峰の途中（4500m）まで行くことになった。マウエンジ峰は荒々しい岩峰で頂上まではなかなか手強いところである。我々は4500mにあるゼブラロックを目指し、高度順応を計った。これが功を奏し、登頂に成功した要因だと思われる。2日間のホロンボハットを後にし、さらに荒涼とした砂漠の道を歩き、最後の前進基地「キボハット」にたどり着いたのが、2月16日午後2時半ごろ、この頃から雲行きが怪しくなり、気温も6度と肌寒くなってきた。明日からはいよいよクライマックスの急登坂が始まる。寒さからか、はたまた緊張からか身震いがする。今夜は早めの夕食を取って18時には床につく。夜10時30分小屋のみんなが起き出し、ざわつく中、軽めめの食

事をとり丁度午前0時にいよいよ出発である。ところが外は雪が舞い、風も少々ある、ガイドのアストンとアシスタントガイド2名が同行するが彼らも完全装備である。オバ・ズボンにパーカーそしてロングスパッツの冬山スタイルで出発をする。他のグループも時を同じくして、順次出発である。時折降る雪の合間にヘッドランプのライトが行列をなして、富士山などで見られる一筋の光の帯となって漆黒の闇を照らす。急坂の登山路は雪が10cm程積もっていたが、そんなに歩きにくくはなかった。画ガレ場のジグザグ道を「ボレ・ボレ」と歩く。さすがに5000mを越える頃になると、息があがる。10分から15分おきには、立ち止まって息を整える、ガレ場の急坂をすぎると岩稜の急坂となり、時折、手を使いよじ登る。午前6時、漆黒の闇夜からしらじらと空が明るくなる頃、キリマンジャロの火口縁に上り詰めると、多くの登山者が休息をとっている。「ギルマンズポイント」(5682m)である。このポイントに7時30分までにたどり着かないと、ガイドに強制下山をさせられて、登頂を断念せざるを得ないとのこと。運良く我々は、6時間はかかったものの、そのタイムリミットには間に合った。寒さに堪えながらさらにキリマンジャロ山頂のウフルピークへと急ぐことにした。ここからは火口縁を左に巻くようにして緩やかな上り下りを繰り返しながらピークへと行く。風は強く寒さも厳しさを強める中、約2時間で待望のキリマンジャロ山頂「ウフルピーク」(5895m)にたどり着く。残念ながら山頂は風雪の荒天気で、周りは何も見えない状態である。山頂にはドイツの登山隊が記念撮影をしており、甲高い声だけが響く。江藤隊員がガイドと感動の包容をし、目は涙で潤っていた。我々も早速、記念撮影。感動の一時を寒さに耐えながら過ごし、30分ほどで下山を開始した。右手に有名な山頂の「氷河」が見え隠れして写真撮影に時間をとられる。すっかり夜も明け明るくなった稜線で雪雲もとれて、氷河が目に見え込んでくる。グローバルな温暖化の影響でこのキリマンジャロの氷河も減衰の一途を辿っていると云われるが、我々の目には、その氷河は圧倒的な姿を見せてくれた。荒れ狂っていた天候も下山する頃には、青空が顔を出し、氷河の蒼さだけが目に見え込んでくる。しばし、感動の時間を過ごし、写真を取り巻くって後ろ髪を引かれながら下山をすることにした。ギルマンズポイントまで下ってくると、天候は完全に回復し、夜中に登ってきた登山路がキノコハットまで続いている。帰りは気分も上々、登頂の感動を胸に秘めながら、快調にとばす。ガレ場では、砂のグリセードで下り、あっという間にキノコハットまでたどり着く。うしろを振り返れば、氷河をかぶった山頂が見える。もう一度写真を撮る。軽い昼食を取り、2日前に登ってきた砂漠の道を小走りで下山する。ホロンボハットに着いたのは丁度16時頃。早速、この一週間我慢をしていた「ビール」での乾杯をする。登頂の成功に気をよくした事もあり、このビールのうまさは格別であった。この日このホロンボハットに登ってきた日本人のパーティーに祝福をされ、またガイドやポーター達にも振舞酒で安堵の夕闇を過ごした。あくる2月18日意気揚々と下山。マンダラハットで昼食を取っていたら、ガイドのアストンがこの下の所から「車」で下りましようかと行って来たので、タクシーが上がってくるのだと思ったが、なんと「救急車」である。考えてみれば、入山のおり、救急対策費を20\$支払っているのだから、利用した方が得策であった。それにしても、2500mまで車道が出来ているとは、ビックリ物であった。お陰でマラングの「キノコホテル」に着いて時はまだ14時頃であった。ここで、一週間ぶりの「シャワー」をかぶり、ガイド達と最後のお別れをする。そしてその日の内にアル・ジャのホテルに向い、次のステージ「アフリカサファリー」への準備にはいる。我々の第一の目的「キリマンジャロ登頂」は無事成功に終わり、この後、1泊2日の「サファリー」とエチオピア観光そして、紀元前の歴史舞台「エジプト」が待っている。このサファリーとエジプトの報告はまたの機会とし、キリマンジャロの報告は終わりにしたい。

【 記 録 】

- 2月13日 マラング・ギボホテル (9:03) ……車移動…マラングゲート (9:31) ……入山手続き (10:30) 出発
P2170m～2270m (12:48 昼食 13:30) ～マンダラハット (15:30) 夕食
マラングゲートで入山手続きの後ゲートをくぐり、ジャングルの中を歩く。約3時間ほどで車道と交差し、昼食を取る。2時間ほどでマンダラハットに着く＊途中休憩6回
- 2月14日 マンダラハット (8:15) ～3270m (昼食 12:28) ～3780m ホロンボハット着 (15:00)
マンダラハットを出発してからすぐジャングルから抜け、草原の緩やかな斜面を登る。時折ウエンジ峰が見え、快適な登山が続く
途中休憩 7回
- 2月15日 ホロンボハット (9:05) ～ゼブラロック 4060m (10:25) ～馬の背 4130m (10:47)
～ホロンボハット (11:55)
この日は高度順応のためマウエンジ峰の途中まで登る。「ゼブラロック」の奇岩を見る。快晴の天候でキリマンジャロの全容が望まれる。
- 2月16日 ホロンボハット (8:15) ～ラストウォーター～4350m (昼食) ～4445m (13:24) ～ギボハット (14:30)
砂漠のサドル地帯をハイキング気分で行く。
- 2月17日 ギボハット (0:05) ～急坂開始～大岩
4960m (1:50) ～岩屋 5120m (3:08)
～ギルマンズポイント 5680m (6:10) ～頂上直下尾根 (7:42) ～ウルフピーク 5895m (8:07) ～ギルマンズポイント (9:20) ～砂走り下部・大岩 (10:20) ～ギボハット (12:45) ～ラストウォーター～ホロンボハット (16:07 着)
雪の降る中、それこそポレポレと口にしながらかくりと6時間かけて急坂を登る。ウルフピークに着いたときは、涙が出るような感動が湧き、しばし呆然とする。天気が回復する毎に、蒼く神秘的な氷河に見とれながら下る。高山病の心配は忘れてしまう。
- 2月18日 ホロンボハット (7:08) ～マンダラハット (11:07) ～車道終点 (12:35) ～マラングゲート (13:18) ～ギボホテル (14:15) ……アルーシャホテル (16:07)
ホロンボハットから6時間の行程で、キリマンジャロ登山は終了し、ギボホテルでのシャワーがさらに晴れ晴れとした気分になさしてくれる。ガイドのアストン等と別れ、次のステージ、「サファリー・体験」と旅は続く。
- 2月19日 アルーシャ (8:00) ……マサイ族部落…ンゴロンゴロ国立公園…サファリー体験…ンゴロンゴロサファリーロッジ (泊)
- 2月20日 ロッジ…マナロ湖国立公園…サファリー体験…アルーシャ…キリマンジャロ空港＝エチオピア空港
- 2月21日～3月1日 エチオピア～エジプト…エジプト観光…カイロ…関西空港…福岡…熊本



頂上直下の氷河

蝶ヶ岳～常念岳～燕岳縦走を終えて

(2008. 5. 31～6. 3)

14308

木曾萬喜治

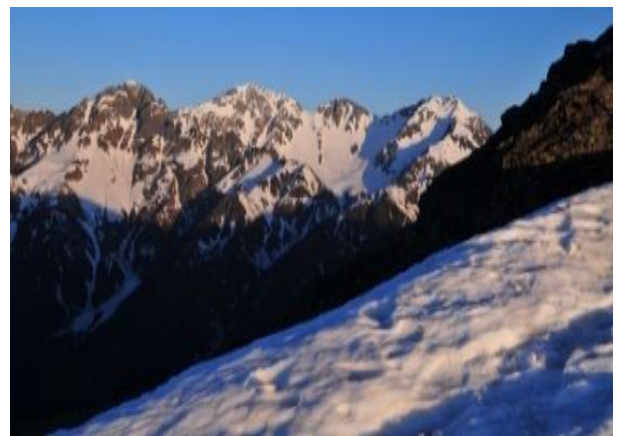
2年前、春のゴールデンウィークに縦走しようと挑んだが常念岳から先が雪崩の恐れがあり当面通行禁止と知らされ、休みの関係上、やむなく常念岳まで日帰りをして翌日、三俣へ下山した苦い思い出のルートである。それ以来、同じ春の時期に常念岳から先の燕岳へのルートを歩きたいと強い思いがあり今年、やっと実行することができた。5月27日に自宅を出発、松本経由で上高地に入る。上高地の写真撮影をするため「山研」に3日間滞在、曇りか雨の日が続く撮影にはあまり良くはなかったが明神池から徳沢園の辺りにかけて白く咲くニリンソウの群落を見ることができた。

5月31日、今日も朝から雨。「山研」を出発、途中バスターミナルによって昼食を購入や不要な食糧、土産品等を自宅に配送。徳沢園には9時、改修中の横尾山荘には9時45分到着、途中で昨年まで穂高山荘で働いていた東京の青年と知り合い横尾山荘で休憩をとりながらしばらく、駄弁って時間を過ごす。横尾山荘からの上りは5月の終わりというのに残雪が多く目印の旗などは通年の連休時期と同じぐらいの位置で見える。後で小屋のスタッフに聞くと3月、4月にドカ雪が降ったせいで今年は例年になく多



(ニリンソウの群落) (穂高連峰)

いとのことである。15時、蝶ヶ岳ヒュッテに到着、登山者は千葉からきた40代の男性と広島・岡山の若い男女9人と計11名、時期はずれのためか登山者は少ない。夕食前、広島・岡山のグループのリーダーから秋に結婚予定の2人のために今から自分たちだけでの結婚式とお祝いをするので是非、一緒に祝って欲しいとのことである。雪山の中、祝う人も少ない山小屋での結婚式に同席できる喜びで参加することにした。夕食前に食堂で人前結婚式の形で進み、広島から持参したシャンパンで祝杯し、夜遅くまで祝宴になった。幸せそうな2人の笑顔と友情の素晴らしさを魅せられた日であった。翌日、彼らは長堀尾根の下り広島・岡山まで帰るため小屋の前で双方、見送られながら別れ、常念岳へと向かった。常念岳まで千葉から来た男性から初めての春山でルートも良く知らないため同行させて欲しいと前日、要請され一緒に行くことになった。蝶



ヶを過ぎる斜面辺りから2年前に来た時と比べ残雪が多く、登山者もなくトレースも目印も全くないルートで慎重に下降していく。途中、樹林帯の中を歩くことになるがルートが不明なため、常念岳の尾根を目指し歩く。雪の状態が悪く、1歩歩くたびに膝まで埋まる状態。ひどい箇所は胸まで埋まり、這い出すのに一苦労する。雪の良い箇所を探しながら歩くと目印の尾根とは反対に歩く

ことになり、まるで迷路の中に入った様な感じで樹林帯の中を右に行ったり左へ行ったり前に進めず、脱出に悪戦苦闘。途中、誰かビバークしたのか新しいツエルトが木に引っ掛かった状態で落ちている。登山者が近くにいいのか、大きな声で呼ぶが返事もない。辺りを探すが誰もいないため持っていくことにした。2年前と比べ2時間以上、時間を費やし、やっと樹林帯を抜けることができた。ここから、常念岳の急登が待っているが樹林帯を抜けるのに体力は消耗しバテバテで休憩が多くなる。幸いなことに天気も良く時間もまだ早いため、ゆっくり休みながら登り、やっとの思いで常念岳頂上に着いた。後はいっきに小屋を目指し下るがここからは雪もなく、夏道だ。本当に楽な下りとなった。小屋には15時半到着、蝶ヶ岳ヒュッテを出て8時間、苦しい日であった。

2年前には常念岳の日帰りをしたことを思うとこれから先の燕岳へのルートは思いやられる。今日のことを小屋の主人に話すと今の時期に常念岳から蝶ヶ岳へのルートは行く人は少なく、蝶ヶ岳へ向かった登山者の中には道が分からず途中で引き返したこともあると話す。また、ツエルトは紛失した話は聞いていないことであったが小屋の主人に渡すことにした。常念小屋も宿泊者も少なく1人で一部屋を利用でき、ゆっくり休むことができた。

6月2日、久しぶりの快晴、4時半に小屋を出発。しばらくは昨日と同じ残雪の影響でルートが不明でハイマツの中を歩くがほどなく夏道が出てきた。それから横通岳まで快調に歩く。横通岳から先はまた、残雪も多く長いトラバースする箇所も多く途中、雪面に滑落した跡が残っていて嫌がうえでもピッケルを使い慎重に通過する。大天井岳の下りも夏道は通れず、頂上から真下に下る冬ルートを使い切通岩まで歩く。ここから燕岳までは雪もない夏道と残雪のあるルートと入り混じった縦走路であったが蛙岩も問題なく通過、写真を撮る余裕のある歩きとなった。13時、燕山荘に到着、一休みした後、燕岳頂上に向かう。今日は燕山荘で泊まる予定であったが小屋のスタッフから夕方から天気は下り坂、明日の天気は雨とのこと。時間も14時半と早く小屋のスタッフと相談、温泉のある有明荘に小屋から連絡してくれる話で、計画を変更して合戦尾根を下りことにした。17時20分、登山口に着いた。この頃から雨も降りだし20分程で有明荘に着くころには本格的な雨となった。今日は12時間程の長帳場の歩きだったが宿の温泉で疲れを癒すことができた。雪に包まれた穂高岳、



(槍ヶ岳)

槍ヶ岳の展望が一日中、見ることができ道にはライチョウが出迎えしてくれるなど昨日とは違い、今日は最高の春山登山を満喫することができた。この縦走にあたって天気も悪く、残雪で悪戦苦闘する箇所もあったが2年振りの縦走ができた喜びの方が大きい。また、蝶ヶ岳ではプレ結婚式に立ち会い、素晴らしい人達に出会うなど思い出深い山行となった。

還暦と日本一周冒険の旅

1008 馬場博行

2008 年、私も人生の轍にしたがってとうとう還暦を迎える歳になってしまった。年々歳を重ねて行く毎に体力と気力は無くなり夢は遠のいて行く。おまけに致命的な心臓の疾患を患い、どん底の縁に投げ込まれたような絶望の日々が一時期続いた事もあった。でも未知なる世界の憧れは私の冒険心をかきたてて止まなかった。この冒険心こそが私の根本をなす精神であり肉体を動かすエネルギーなのだ。原付自転車ホンダ・リトルカブ 50cc の車体は、前後左右の車輪に登山装備と生活用具を詰めたサイドバックで固定された。前ハンドルの籠と後ろの荷台にも一つずつ、合計 6 個の荷物が固定されている。きゃしゃな車体は大きな荷物で埋まり、とても原付チャリ 50cc のカブとは思えない堂々たる風体となってしまった。一見すればハーレーデビットソンのようだ。私の旅装は黒のパンタロンに赤のオーバーヤッケ、背中には光沢のある真っ赤なてんとう虫のようなリックを背負い、頭には現役時代に被っていた工事用ヘルメット。ヘルメットには NTT のマークが入っている。この風変わりな乗り物と、風変わりなスタイルを、我が家の玄関先で訝しげに見送る 6 つの目が在った。愛犬ワンサクと細君と娘である。娘はニヤニヤしながら、「なんだか、空き缶拾いのオッサンみたい」などと難癖つけた。細君もワンサクもなるほどと同調している。娘はスペインとオーストラリアの 1 年滞在をそれぞれに終え、帰国したばかりで、やがてウィンへ語学留学の為に出発する。もう当分は会えないだろう。10 月 2 日午前 10 時「いつかキット」若き日に心に誓った日本一周の冒険の旅が始まった。私は産山経由で小国へ出て耶馬溪の山国川沿いに下った。初日は大分県中津の周坊灘へと流れ込む山国川の広い河川敷にテントを張った。翌日は門司と下関を結ぶ人道入り口の海の中の関門トンネルを押して渡る。後は日本海沿いにテントを張りながら北を目指して走るだけだ。鳥取の米子あたりから雨に降られ、以降ずっと降ったり止んだり、空はいつも曇っていた。岡山、兵庫、京都、福井そして石川県金沢の兼六園から思いつくまま国道 304 号線を辿った。長い越中五箇山トンネルを過ぎると岐阜の五箇山集落が見えてくる。五箇山の合掌集落は白川郷のそれより規模は小さかったが、往時のひっそりとした山間部の素朴な生活が残っており、厳しい自然の中で息づく村人の様が伺えるところであった。さて、白川郷を過ぎ、飛騨高山から安房峠 1790m を越えた。峠からは奥穂の残雪がガスの切れ間から透けて見えた。周囲の山肌は錦織り成す紅葉と白樺林の景色が広がり奥飛騨にいる事を改めて懐かしく実感した。梓川を下り松本に出、高瀬川の流れに沿って糸魚川街道を走った。左手には北アルプス連峰群の鹿島槍ヶ岳、五竜岳、白馬岳の懐かしい山々が望めるはずであったが、残念な事に厚い雨雲に覆われ見えなかった。糸魚川からさらに日本海沿いに新潟、山形、秋田、青森と次々に北上する。天候は相変わらず悪くずっと雨具を着たままだった。濃紺色した日本海は荒れ狂い、逆巻く高潮は行く手の道路をびっしょりと濡らしていた。10 月 10 日午後 3 時半、とうとう津軽半島先端の竜飛岬に達した。竜飛岬からは北海道を結ぶ青函トンネルがある。暗く冷たい藍色の津軽海峡は雨雲のわずかな切れ目から、柔らかい光りが海面に降り注ぎ、凍える波は魚影の群れのように銀色にキラキラ光輝いていた。10 月 11 日午後 5 時、青森港から函館へフェリーで渡る。翌朝、埠頭に張ったテントを出発。長万部、そしてニセコの目も鮮やかな、ヨーロッパアルプスを思わせるような美しい高原を抜け、日本海沿いに小樽、札幌、留萌、サロベツ原野と走り稚内へ

到達した。翌朝 15 日、稚内港から利尻島鴛泊港へ渡る。利尻はアイヌ語の（リィシリ）で「高い島」と言う。周囲 63 k m、人口 2972 人のこの小さな島を時計の針とは反対に一周する。あいにく季節外れで野の花を愛でる事はできなかったが、至るところ海辺に流れ込む溶岩に、赤い真っ赤なハマナスの実が夏の名残を留め冷たい風に寂しく吹かれていた。16 日午前 3 時起床、4 時 10 分ヘッドランプを頼りに甘露水から利尻山頂上を目指す。シーンと静まり返るねっとりした漆黒の闇の原生林を白い息を弾ませながら登る。6 合目付近に来ると風雪に耐え抜いてきたダケカンバ群が一樣に頂上方向へ腰を折ってうな垂れており、宗谷海峡から吹きつける風の強さを物語っていた。北には礼文島が浮かんでいる。さらに目を凝らすとその奥にかすんで見えるのはサハリン〔樺太〕であった。利尻山（1721m）別名利尻富士は 20～30 万年前に出来た火山の山である。頂上直下は赤茶けた溶岩の砂利に足をとられながら登る。7 合目付近は 9 月の下旬に 10 c m～15 c m の初冠雪があったと言う。今はほとんど消えてなくなり、かろうじてダケカンバの陽のあたらないところにその根雪を感じるくらいであった。念のためにアイゼンとピッケルは持参したが使用する事も無く午前 9 時 30 分、崩壊が激しく進む頂上に到達した。頂上には立派な祠が祭ってある。祠にはいつ誰が備えたのか、ミカン 1 個がコチンコチンに凍り付いていた。頂上からは 360 度視界をさえぎる障害物もなく真っ青な空と紺碧に輝く水平線が何処までも続いていた。10 月 17 日、利尻島を離れ日本最北端の宗谷岬を目指す。間宮林蔵が帆船でサハリン〔樺太〕に渡った所だ。私にとって宗谷岬は旅の折り返し地点であり、新たな冒険の始まりでもあった。我が家を出てから 15 日目、距離にして 3079 k m の地点だった。宗谷岬を回りこむと紺色のオホーツク海が広がっている。国道沿いの海岸では吹きさらしの冷たい風をものともせず鮭釣り人達が竿を延々と砂浜に突き立て釣り糸を垂らしている。その釣り人達を砂丘から見おろしていた一人の紳士が背中を丸めて「そろそろ本格的に雪が降り始めるんですよ」と語りかけた。この白いフワフワした小さなものは雪子（ユキンコ）と言って、こいつがやって来ると北海道も本格的な冬が始まるのです。網走をぬけ知床最高峰羅臼岳（1661m）の登山向かう。登山口は地の果てホテルの裏だ。地の果てはアイヌ語で知床〔シリエトク〕である。登山口には厳戒注意事項が張ってある。「今年は尾根上に蜂の巣が異常発生、熊がその巣を狙って頻繁に来るので要注意！！

単独行動は避け、鈴は必ず携帯しよう！！」登山を躊躇するような恐ろしい内容の注意事項であった。鈴の代わりにラジオをガンガンかけて登りながら、時々「ワー」と叫ぶ。自分の存在を熊に知らしめる為である。もし熊と鉢合わせしたら絶対後ろを向いて逃げてはならない。死んだ振りしてもならない。ジッと熊から視線を外さずゆっくりと後ずさりをする事。これらは地元の人から得た生々しい教訓であった。紅葉に彩られた美しい樹林をぬけてしばらく登ると、羅臼岳頂上直下は熊笹が一面に広がる牧歌的な美しく緩やかな風景が広がっていた。しかし頂上は巨大な岩がゴロゴロと不自然に積み上がり、足場が悪く狭い落ち着かない風の強い山頂であった。山頂からは知床半島の連山がところどころ雪の斜面をくゆらせながら遠く波うつて、オホーツク海と根室海峡の間へ静かに沈みこんでいた。残念ながら蒼穹を行く雲のために北方領土は確認できなかった。山を下りてから知床半島を横断し羅臼町へ向かった。根室海峡を挟んで向こうに国後島〔北方領土〕が見えた。羅臼から根室の本別海町に至る 90 キロの海岸線は日本で一番北方四島に接近した場所である。しかし北方領土返還の看板がたった 1 枚しかなかったのは以外であった。ロシア側の言う領土解決の為の「新たな独創的で型にはまらない

アプローチ」とは何を意味するのであろうか・・・根室の本別海から国道 243 号線を辿り摩周湖、屈斜路湖、阿寒湖へ足を延ばす。摩周湖は霧も無く、見晴らかす湖面はエメラルドブルーに輝く宝石のようであった。こんなに美しく神秘的な湖が日本にも存在する事を誇らしく又嬉しく思った。10 月 21 日 阿寒湖湖畔に張ったテントから雄阿寒岳（1371m）山頂を目指した。阿寒湖は深い霧に包まれ水墨画を思わせる幻想的な日本の原風景が広がっており、数十等の鹿が群れを成して水を飲んでいて。針葉樹林のだらだら坂をジグザグに登り返して山頂に到着した。眼下には遊覧船を浮かべた毬藻の生息する阿寒湖、そして硫黄煙を上げる雌阿寒岳（1499 m）が目の前に聳えていた。10 月 23 日小雨降る中、帯広を抜け襟裳岬を目指す。襟裳岬の黄金道路の海岸には荒れ狂う波で根こそぎ剥がれた昆布が浜に打ち寄せられ、大勢の漁民達が波間を縫って大急ぎで拾い集めていた。襟裳岬はさぞかしロマンチックな所であろうと期待していたが、季節外れの今はヒューヒューと唸りを上げる風の中に土産品店が 3 店舗ほど軒を連ねただけで何も無いところであった。鉛を流し込んだような陰鬱な空の下、断崖は 60m 程に切れ落ち岩礁を連ねて荒れ狂う太平洋の波しぶきの中に沈みこんでいた。苫小牧では嵐のような風と雨に捕まり、テントのポールが折れ、ひたすら窮屈で退屈な狭いテントの中で二晩を過ごし、10 月 25 日、室蘭を経て函館港へ向かった。長万部から森町までの国道 5 号線は往路走ってきた懐かしい見覚えのある道路だった。森町からは亀田半島に突如と聳える駒ヶ岳 1131m を太平洋側に回りこみながら走り続ける事 3 時間、午後 6 時 30 分頃函館港へ着いた。港の待合室の椅子で朝一のフェリーを待って本州へ渡る。往路は青森港から函館港に渡ったが、復路はここ函館港から下北半島の大間港へ渡る。どうしても恐山に足を延ばしたかったからだ。しかし、生憎な事に 26 日は朝早くからまた雨が降り出し、以後ずっと天気が悪く津軽海峡は思いのほか時化していた。雨の降る大間崎港は寂れた小さな漁村のように思えたが、日本近海で取れるマグロの漁場として有名である。ちょうどその日は日曜日とあってか小雨の降る中にもかかわらず、この小さな漁港はマグロの解体ショーで賑わっていた。恐山に立ち寄り更に下北半島の陸奥湾沿いに南下するが雨がひどく、やむをえず一泊素泊まり 3500 円の民宿の玄関を叩く。夕食は持参している食料で極力済ませようと思ったが、強烈なブルジョア意識が弱った心の隙間に付け入るように、若くて一段と美しい東北美人のお上さんに晩酌つきの夕食を見栄を張ってたのんでしまった。おかげで料金は驚くべき事に一気に 6000 円に跳ね上がった。久しぶりの風呂から上がって部屋に入ると、コタツの上に溢れんばかりのご馳走が熱燗の酒と共に並んでいた。やっぱりこの世が金である事を否応無しに実感させられた。しかも家を出てから初めてのご馳走に狂喜し感激してしまった。この冒険の旅のもう一つの楽しみは、職場の訓練で三重県の鈴鹿学園で 40 年前に分かれたきりの岩手県二戸に住む友人を何の前触れもなく突然訪ね驚かせる事であった。しかし 40 年という長い歳月は誠に残酷であった。頭の中には 40 年前のあの頃の若い肉体と美顔と、夢も前途もあった立派なあの青年が刹那にして、60 歳の中老年のお百姓さんになっていたのである。これこそ浦島太郎を地で行く物語ではなかったのか。リンゴの箱詰め作業を止め突然の来訪に友人は言葉を失った。私は私で古木のように変わり朽ち果てた友人の容姿と顔に戸惑ってしまった。「誰だかわかる？」返事がない 「俺だよ俺」彼は返答に窮した。「熊本の本馬場だよ」と名のる前に、私とは一面識もなかった奥さんが不思議な事に、第六感でピーンときたらしく「熊本の…」と自信なさげに恐る恐る口から漏らした。かたや何の心の準備もないまま突然あらわれた珍客に対して、彼はどう振舞ってよいものか随分戸惑った様子だった。

やっと何のわだかまりもなく昔の話に花が咲くのは夕食をご馳走になるまで時間を待たなければならなかった。しかし顔や姿は変わっても、驚くべき事に声だけはお互い 40 年前と同じだった。

10 月 31 日、仙台市手前約 30 k m 三本木横断歩道橋下からテントを這い出し、午前 4 時、孫のいる川崎に向けて出発した。相変わらずしょぼしょぼと雨が降る真っ暗な朝だった。宮城、福島、栃木、茨城、埼玉、そして東京へ延々と国道 4 号線を走り続けた。今までになく腰が痛い、体がだるい、頭が痛い、時々意識が遠退く、そして交通渋滞にもみくちゃにされながら上野駅前を過ぎ、銀座を過ぎ、とうとう東京駅まで来てしまった。ネオンサインと車のライトと溢れんばかりの人ごみ。辿るべき道は何处だろう。持っている地図をネオンの光りに透かして見るが複雑する道路はさっぱり解らず途方にくれた。家路を急ぐ人に道を尋ねるが、皆忙しく歩くばかりで構ってくれず途方にくれた。だがやっと川崎に住む長男の嫁サクラちゃんと連絡が取れ、孫の大成とやっと逢う事が出来た。両手を差し出すと、天使のような可愛い瞳をクルクルさせながら私の両手に飛び込んできた。1 年と 10 ヶ月になった大成坊やであった。疲れた体はたちまち超特級のビタミン剤でも飲んだように見る見る回復した。大成は 2006 年 12 月 10 日スペイン国グラナダ生まれである。抱きしめながらこの不思議な生き物から得た不思議な力と幸せは今回の冒険旅行での私の最大の喜びとなった。この日は一日で宮城、福島、栃木、茨城、埼玉、東京、神奈川の 7 県を一気に走りぬけ、その距離はなんと 402 k m にも達していた。

夢のように楽しかった大成と三日間を過ごした後、川崎から相模湾沿いに走り伊豆半島を一周して沼津へ出た。富士山は登るつもりではなかったのだが、伊豆長岡から見える富士の端整な姿に引き寄せられて御殿場口新 5 合目 (1440m) まで来てしまった。山頂まで高度差 2334m。時計を見ると 9 時である。登山するには少し遅すぎる時間であったが、足は山頂を目指して登りだしていた。6 合目辺りから風が強くなり時々竜巻を起こしながら視界を覆い通り過ぎて行く。シーズンオフに入った山小屋という山小屋はすべて窓と入り口は分厚い板が 5 寸釘で厳重に打ち付けられていた。「入ったら不法侵入で逮捕されます」「また中に入って使用した物については警察に届けた上必ず弁償してもらう」などと書かれている。3 c m の分厚い板に 5 寸釘で厳重に打ち付けているのだから何もここまで書くことは無かろうと思った。強欲主義者の警告のようであり気持ちが良いものではない。無理なら引き返せばいいと思って登り出したのだが、登るに連れて気持ちが変わり絶対頂上まで行こうという気になってしまった。ダメなら途中でビバークすればいい。シュラフなしでも十分耐える自信はある。所々ルートは雪でコチコチに凍結していた。頂上へ到達したのは 4 時近かった。案の定、大砂走りを下る頃は真っ暗でヘッドランプを頼りに一気に駆け下りた。

11 月 3 日御殿場口新五合目バス停の長椅子に横たえた体を起こし、駿河湾沿いに静岡、焼津、浜松、そして渥美半島の伊良湖岬からフェリーで三重県鳥羽に渡った。大宮大台の道の駅で一泊した後、熊野灘沿いに和歌山市の和歌浦港まで 331 k m を走った。和歌浦港に着いた時は真っ暗で、待合室の硬いプラスチックの椅子に腰掛けて固まりそうな腰を何回も伸ばしながら翌朝一番の徳島行きのフェリーを待った。徳島からは海岸線を走り高知県室戸岬を目指す。四国八十八箇所をお参りする白装束のお遍路さんがちらほら目に入る。長年勤めた会社を定年退職して夫婦でのお遍路の旅であろう。私も又機会があれば細君と肩を並べてお遍路の静かな道を歩く事が実現できたら好いなししみじみ思った。室戸岬から太平洋に面した土佐浜街道を走り高知市伊野町、道の駅の屋根下で 1 泊した。翌 6 日、四国の最高峰石鎚山 (1982m) を目指す。

清流沿いに作られた国道 194 号線を登ると本川に出る、真っすぐ行けば愛媛県西条市だ。私は本川から 194 号線を外れ石鎚山方面の美しく紅葉した深い谷間の小道坂を辿る。美しい清流はヤマメたちが住むには格好の場所のように思えた。峠を越えると視界が開けすぐそこに石鎚神社がありここから登山を開始する。途中二人連れの森林パトロールの人を追い越し、垂直の鎖場を登って見覚えのある神社の山頂にでた。15 年前我が家から自転車で来て、面河溪から登った事が懐かしく思い出された。森林パトロールの人が後ろから「あなたはとても早いですね、私が知っている早い人の 5 本指に入りますヨ」私は少し照れくさかった。

「いやいや 5 本指の中でも一番早いかもしれんな〜」などと考えた様子で、近くにいる登山者までにも言いふらしている。そんな事で恥ずかしくなった私は話題を変えようと、今回の冒険の旅を少しばかりいい訳がましく説明しなければならない破目になってしまった。

「向こうに出っ張った岩が在るでしょう、あそこが本峰ですよ」とパトロールの人が指差した。「ナイフリッジになっているから気をつけて下さい、先だって転落事故があったばかりですから」いかにも森林パトロールの人らしく丁寧で要領を得たアドバイスだった。私が頂上から引返してくると、一部始終を見ていて私の仕事を意味心に聞いた。「ひょっとしたら、とび職か電力会社。関係じゃなかったですか」などと勝手に決め込んだ。「ええマア〜NTT だったんです」なるほどそれで合点がいったと言う表情で、「ずいぶん鉄塔にも登られたんでしょう？」NTT には電力会社のような高い鉄塔などなかったが「エエ…。まあ〜」と濁した。「ああやっぱりそうですか、そうでしょうね足場の悪い所をいとも簡単にスイスイあんなに行けるはずがありませんからね」紅葉真っ盛りの石鎚スカイラインは身も心をも痺れさすほどに美しかった。愛媛県面河溪から再び高知県に入った。11 月 7 日、津野町にある四万十川の源流点を目指した。源流点は不入山 1336m の東斜面標高 1200m 付近の雑木林から僅かに染み出していた。正に、ここが大河を成す四万十源流点の大河の一滴であった。私はここ源流点から土佐湾に注ぎ込むまでの 196 km にも及ぶ日本最後の清流四万十川沿いを忠実に下った。そして、四万十川が支流をかき集め次第に川幅を広げ大河となって、ゆっくりと土佐湾に流れ込むのを確かに目撃した。その後、足摺岬に立ち寄った。北緯 32 度 43 分 24 秒、東経 133 度 1 分 12 秒、黒潮打ち寄せる岬の先端にポツンと寂しく灯台が建っている。又、展望台入り口には幕末の政局に大きな役割を果たしたジョン万次郎の銅像が太平洋の遥か彼方の水平線を見つめていた。

11 月 8 日土佐清水の道の駅を午前 5 時に出発。どしゃ降りの中、宿毛港を目指し伯佐港に渡る、雨の中を更に日向灘沿いに南下し、宮崎市内から都城へ抜け鹿児島港から沖縄へ渡る。冒険旅行最後になった沖縄の一周を果たし（沖縄ではまだ蟬が鳴いていた）11 月 14 日無事に我が家へ到着した。我が家を出てから 43 日振りの事だった。これで緊張した日々から解放されるのだと自分に言い聞かせた。話をまだまだ続けたいのですが、予定されている紙数をだいたいオーバーしてしまい、終盤の旅の話は次回という事で割愛させていただきます。今回の旅の総延長距離は 9929 km に達した。内訳は原付チャリでの走行 8044 km、フェリーでの走行は 1885 km である。ちなみに、9929 km という距離は東京を基点として直線距離にすればアメリカ合衆国のカンサスシティ、ニュージーランドのオークランド諸島、エジプト、ヨーロッパではフランスまでの距離に匹敵し我ながら驚いている。足を延ばした主な名所旧跡は、広島県三段峡、島根県出雲大社、鳥取砂丘、福井県東尋坊、金沢兼六園、富山県五箇山合掌村、岐阜県白川郷合掌村、上高地白骨温泉、長野県翡翠峡、青森県竜飛岬・丸山三内遺跡、北海道野寒布岬、宗谷岬、網走刑務所、知床五湖

、オシンコシンの滝、知床峠、摩周湖、屈斜路湖、阿寒湖、襟裳岬、青森県恐山、和歌山県鬼が城・熊野速玉大社、高知県室戸岬・四万十源流点・四万十川全長 196km の完全走破・足摺岬、沖縄の首里城。登頂した山、北海道利尻山（1721m）・羅臼岳（1661m）・雄阿寒岳（1371m）、静岡県富士山（3776m）、高知県石鎚山（1988m）旅の工程で都合上、足を踏み入れなかった県は次の通り、長崎県、佐賀県、香川県、岡山県、滋賀県、大阪、奈良県、千葉県。原付チャリ 50 cc ホンダ・リトルカブは一度も故障せず。最後まで私と共に旅をしてくれた事に感謝。本当に貴方は世界最高に素晴らしい。そして、快くこの冒険旅行を送り出してくれた細君にこの原付きチャリと同様に感謝したい。

最後に地球誕生 46 億年、そして生命が 38 億年前に誕生する。38 億年の生命を絶やすことなく私はここに「今」その命を受け取っています。私という人間は実は気の遠くなるような不可知な存在なのです。この事に思いを馳せれば、「永遠の今」という現在の自分の生命がどんなに素晴らしく尊いものであるかが理解できるのです。しかし、そのような思いはすぐ忘れ去られます。なぜ？そこには「死」の存在が無いからです。私は自分の生命を 5 年のスパンで生きています。5 年で死に且つ生まれ変わります。私の生命はこの 5 年周期の連続の上に成り立っています。故に 1 日 1 日がすごく貴重で大切なのです。死を考える事から学ぶ事は非常に大きいものです。死によってすべての執着から解放されます、解放されるから人に優しく怒る事ありません。怒る事がないからいつも心は平和でいられます。5 年一巡の死と生、これはより良く自分の人生を生きる為の私の哲学です。「死」それは決して不吉なものではなく、絶え間ない生への充実なのです。昨年、還暦という人生の節目を迎えた私は、これからも 5 年一巡の生と死を繰り返し生きます。死が生み出す生への感謝と喜びを持って精一杯、二度とこない、「今」という自分を家族と共に大切にしながら「果てしない冒険という人生」を生きて行こうと思います。今回の旅もその一環として実現させたものです。

2009 年 3 月 9 日 馬場博行 記

詳細に足跡を記す

10 月 2 日（晴）36253 km～（36432 km）

合志市幾久富 1714-18 の自宅か機知に富んだ偉大なる冒険の旅へ出発

大分県中津の山国の河川敷にテント泊

10 月 3 日（晴れ）36432 km 山口県田万川公園の吹きさらし吾妻や借りて野宿（真夜中パトロールの警察官 2 名に怪しまれ職務質問を受ける）

10 月 4 日（晴れ）36646 km 島根県安来市に流れる河川敷にテント泊

10 月 5 日（曇後雨）36902 km 京都府宮津市由良浜ビーチ公園の吹きさらし吾妻や借りて野宿

10 月 6 日（雨後曇）37188 km 福井県新保町公園の吾妻や借りて野宿

10 月 7 日（曇）37581 km 岐阜県清美村の化石が展示してある吾妻へテント泊

10 月 8 日（曇）37779 km 長野県白馬道の駅の空き地にテント泊

10 月 9 日（晴）38106 km 新潟市関や浜海岸公園の吾妻へテント泊

10 月 10 日（曇後雨）38330 km 秋田県琴浜道の駅テント泊

10 月 11 日（曇後大雨と強風）38588 km

青森県津軽半島蓬田村のコンコン稲荷神社の参道でテント泊

10 月 12 日（晴）38639 km 青森港からフェリーで函館へ渡る函館埠頭にテント泊

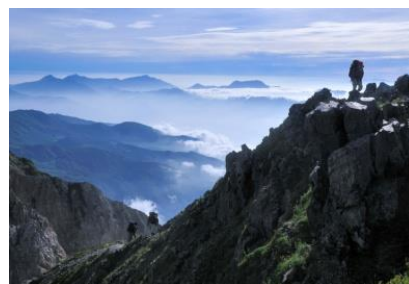
10月13日（曇）38945km 石狩平野の厚田バス停小屋泊〔カメムシ騒動〕
10月14日（晴）39227km 野寒布（ノシャップ）岬公園でテント泊〔野生のカモシカ君と出会う〕
10月15日（曇/晴）39304km
稚内港から利尻島へ渡る。利尻島一周。利尻山の鴛泊キャンプ場にテント泊。
10月16日（晴）利尻山登山
10月17日（曇/雨/雷）39453km 宗谷岬をぬけ幌別川の枝幸公園でテント泊
10月18日（曇/晴）39675km 斜里町浜小清水公園でテント泊
10月19日（晴）39766km 知床岩尾ユースホテル泊
10月20日（晴/曇）39824km 臼岳登頂後、知床半島を横断し羅臼町峰浜港公園でテント泊
10月21日（晴）40076km 阿寒湖湖畔でテント泊
10月22日（曇/小雨）40209km 帯広市内公園便所でテント泊
10月23日～24日（大雨/強風）で停滞 40530km
苫小牧市内民家の軒先でテント泊（テントのポールが折れる）
10月25日（曇/雨）40861km 函館港ターミナル待合室泊
10月26日（雨）41013km 青森県下北半島横浜町民宿泊
10月27日（曇/雨）41085km 岩手県二戸の友人宅に泊
10月28日（曇/晴）41333km
岩手県盛岡の三原洋子宅を訪ねた後、宮城県三本木歩道橋下テント泊
10月29日～31日（曇/晴）41747km 神奈川県川崎の孫大成と再会し泊まる
11月1日（曇/晴）42016km 静岡県伊豆長岡市内道の駅テント泊
11月2日（晴）42066km 富士山登頂後、御殿場口新五合目バス停の長椅子でごろ寝
11月3日（曇/小雨）42383km 愛知県渥美半島の伊良湖岬からフェリーで三重県鳥羽に渡る。
三重県大宮大台道の駅の軒先でゴロ寝。
11月4日（曇）42714km 和歌山県和歌山港のターミナルの椅子で腰掛けたまま夜を明かす。
11月5日（曇）42874km 和歌山県和歌山港からフェリーで徳島に渡る。室戸岬から高知県伊
野町道の駅軒先でゴロ寝。お遍路参りと知り合い宗教談義
11月6日（晴/曇/雨）43129km 愛媛県石鎚山登頂。高知県佐川町公園の吾妻でゴロ寝
11月7日（曇/晴/雨）43479km 四万十源流点から四万十川沿いに下り、足摺岬から高知県土佐
清水三崎道の駅軒下でゴロ寝
11月8日（大雨/曇）43849km 宿毛港からフェリーで大分県佐伯港に渡る。宮崎市内から鹿
児島県末吉道の駅軒下通路でゴロ寝（野良のミャン吉君とお友達になる）
11月9日（曇/雨）?????km フェリー泊
鹿児島港から沖縄へ渡る〔大島～徳之島～沖永良部島～与論島～本部～那覇港〕
11月10日（曇/雨）友人軽トラで迎えに来ていた。
沖縄那覇港～南城市。友人の好意でリゾートホテルに泊まる
11月11日（曇/雨）停滞 友人の好意でリゾートホテルに泊まる
11月12日（曇/風）44094km 沖縄一周後、那覇港近くの温泉ビジネスホテル泊
11月13日（曇/風）44094km フェリー泊
11月14日（晴）44297km 鹿児島港から自宅まで

唐松岳～白馬岳～雪倉岳～朝日岳の夏山縦走

(2008. 7. 30～8. 4)

14308 木曾 萬喜治

北アルプスの全ルート縦走計画を7年前から計画し毎年、7日から10日間をかけて2回以上、北アルプスへ出掛けてきた。この縦走計画の内、最後に残ったのが雪倉岳から朝日岳かけての縦走路である。今年の夏は天候不順で出発日が定まらず、いつ出かけて良いように準備をいていたが2日前の天気予報で長野方面も天気が回復する予報がでたため7月30日、自宅を出発。名古屋経由で夕方、松本駅に到着、駅前のホテルが今夜の宿とした。7月31日松本駅発7時の電車に乗り白馬駅に向かう。予定通りに9時、白馬駅に到着しゴンドラ乗場へ行く。ゴンドラに乗り、終点の八方池山荘からいよいよ登山が始まる。八方尾根はこれまで春・夏を通じて6回登るが左手には五龍岳、鹿島槍ヶ岳、右手には白馬三山が身近に見える好きなルートだ。観光客を追い越し、快調に飛ばす。何しろ今年から小屋泊まりをしていたためテント、食糧が減った分だけ軽く楽になった。昼食、写真を撮りながら13時40分に唐松荘に到着。小屋は増改造中で幸い、新しい部屋に入ることができたが予想した通りシーズンの真最中であって満杯状態。8月1日 急ぐことは無いが6時45分小屋を出発、程なく唐松岳山頂に到着。これから行く不帰キレットはガスで見えない。写真を撮るため1時間半ほど粘るが見えない。諦めて頂上を後にした。順調に三峰、二峰、一峰と続く核心部を通過、天狗の頭からくる登山者もなく幸い、渋滞に遭遇することもなく天狗の大下りを登ることができた。不帰キレットを見渡せる場所で初めて登山者と出会う。50歳以上の女性の登山者が数名、このルートは初めてで岩場の経験は無く通ってきたルートの様子を聞いてきた。危険な箇所など丁寧に教え理解したのか女性グループは出発。遠くから岩に必死に取りついている様子がよく分かり思わず苦笑い。しばらく様子を眺めていると次から次と登山者がきて同じ質問がくる。その都度、返事をするが心配で核心部を通り過ぎるのを見てしまう始末、とうとう大休憩となった。唐松小屋から目と鼻の先にある天狗荘に宿泊。北アルプスの縦走した中で始めて初めてのんびりとした日を過ごす。8月2日 この日も天気が良く、前日の休憩した分を歩くため早朝、6時に天狗山荘を出発。疲れも取れ順調に鍵ヶ岳、杓子岳を通過、予定通りに10時に白馬山頂に立つことができた。白馬山頂は4回目であるが今回もガスで見通しが利かない。早々に頂上を後にして雪倉岳へ向かう。三国境を過ぎる頃からガスも切れ始め青空が広がってきた。



鍵ヶ岳～白馬岳にて

雪倉岳避難小屋から登りが続き、夏の暑さも手伝ってペースが落ちてきた。13時、雪倉岳山頂に到着、頂上は広く大きいいため三角点で頂上と分かる。朝日岳へはアップダウンが続く長い道のりで今日は頂上に向かわず朝日小屋へのルートを取る。途中には高山植物の花が多く咲いていて疲れを癒してくれる。登山者も少なく静かなルートである。17時、朝日小屋に到着。今日は11時間の歩きとなったがそれ程の疲れはない。早速、宿泊手続きをするが何処に登山者がいたかと思うほど小屋は満杯の状態。このため、一番奥の部屋に通され、入口辺りに自分の寝るスペースを割当られた。この結果、他の登山者がトイレに行く際、何度も足を踏まれその都度、起こされることになりお陰で睡眠不

足となった。8月3日 6時半小屋を出発、1時間程で朝日岳頂上に立つ。これで7年越しの縦走計画も無事、怪我もなく終わったのかと思うと達成感と多くの縦走路の思い出が思い起こさせ感無量である。しばらく景色を眺め、蓮華温泉に降りて行く。朝日岳から蓮華温泉にかけては多くの高山植物が咲き乱れていて長い道も飽きることはない。17時、蓮華温泉ロッジに到着。ゆっくり温泉に入る。これでこの縦走計画も終わりとなったが唐松岳から朝日岳までわずか3日間であったことから金沢で途中下車して白山に登ることにした。8月4日 今日は前日の晴れと変わって朝から雨、金沢に向けて蓮華温泉を後にしてバスに乗り込む。今回の縦走の内、唐松岳、白馬岳は何度か登った経験もあり危険な箇所も難なく通過することができた。また雪倉岳～朝日岳のルートは初めてであったが危険な箇所もなく、高山植物は多く、のんびり歩くルートとしては良いルートと感じられた。ただ今回は不帰キレットでゆっくりし過ぎて白馬岳まで行けなくなり天狗山荘から朝日小屋まで長帳場となったことが今回の反省点であった。全体をとして天気も恵まれ、のんびりと周りの風景と高山植物を眺めながら楽しく夏山縦走ができたことは充実した気分一杯となった。

来年からは何に挑戦するか決めていない。ゆっくり考えて目標を定めよう！！

「九州脊梁山地観光圏」について

12909 永谷 誠一

先日「霧立越の歴史と自然を考える会」会長秋本治氏より表題「観光圏整備事業に関わる提言書」を頂いた。これは平成20年7月に「観光圏整備法」が施行され、それに基づいて「九州脊梁山地観光圏」を設立しようと言う氏の提案である。九州中央山地国定公園を内包する熊本県、山都町、水上村、八代市五家荘、美里町、それに宮崎県五ヶ瀬町、椎葉村に呼びかけプロジェクトチームを設けて国や行政機関に働きかけ、一大観光圏を樹立し県内外多くの登山客、観光客の受け入れを図る構想である。私も早くからこの山域の魅力にとりつかれルートの開拓にかかわり、北の玄関口黒峰より南銚子笠を経て水上村に至る70kmのロングトレイルを整備し、愛好者の目をこの地域に向けたいと思っていたところに、この秋本氏の提言である。平成20年には既に阿蘇くじゅう地域デザイン会議による「阿蘇くじゅう観光圏」（阿蘇市、南小国町、小国町、産山村、高森町、南阿蘇村、西原村、山都町、竹田市）と東九州観光圏（別府市、臼杵町、由布市、大分市、津久見市、佐伯市、延岡市）の二カ所が指定を受けている。提言の内容もまずは広域のマップを作成し、未開ルートの開拓や道標の設置、ガイドの養成を急務としており、縦走路途中適当な場所に山小屋、避難小屋を設け登山者に縦走の楽しさと安全を図りたいとの意向である。私もこの提案には全く同感で、この事業の推進には全面的に協力をしたいと願っている。昨年10月開催した「九州脊梁山脈トレイルラン」もこの構想の一端であり、宏大な九州中央山地を全国に向け紹介する絶好の機会だと喜んでいる。今日長野県北部より新潟県に連なる開田山脈90km、又、滋賀県と福井県の県界尾根の高島トレール70kmが注目されているが、この九州中央山地トレイルはこれらに負けないロケーションであると確信を持っている。熊本支部の皆さんにも是非これに呼応して頂き、ご協力をお願いするものです。

40年振りの霧ヶ峰

8605 門 脇 愛 子

霧ヶ峰！そのひびきや山の小説、随想等から憧れていたその地に立ったのは昭和44年（1969年）の夏だった。グループで白峰三山(北岳、間の岳、西農鳥岳)を登頂した後、単独で霧ヶ峰に向かった。(以下、山日記より)「上諏訪から国鉄バス、凄く狭い道で離合が大変、霧ヶ峰に出ると草原のドライブウェイ、車掌がいろいろガイドしてくれる。終点に着くと、凄い車の群れにうんざり。家族づれが多いこと。昼食後車山に歩き出すと静かな草原の径になる。それにお花畑が素晴らしい。1時間ほどでコロポックルヒュッテに着き、荷物を預け、車山山頂へ。眺望はよいが遠望はきかない。車山湿原地帯(天然記念物指定)や、その辺の高原を存分に歩き回る。

夜は8年間待望のコロポックルヒュッテ、期待に違わぬ素晴らしい小屋だ。気にいった！中の造り、調度品、ベットも二段のしゃれたもので、椅子だの、ランプだの・・・山小屋風。今夜は盆休みの関係で客は多いが、又シーズンオフにでも来てみたい。

翌日、朝の高原はすがすがしい。朝食まで、又食後出発まで高原と、それ以上にヒュッテに名残を惜しむ。バスで小諸に直行。この後戸隠山に登り、白峰三山含め10日間の山行は終わった。

この時より希望を持ち続け、待つて待つてやっと希望が叶ったのが、2008年8月「自然を愛する会」が企画した「蓼科山、霧ヶ峰、美ヶ原」の山旅だった。足を痛めた後で少々気になったが、蓼科山は遠慮し、4人で本隊と別行動で霧ヶ峰に行くという事で参加した。目的は40年ぶりにコロポックルヒュッテを訪ねることだった。車山山頂や道路はすっかり変わってしまい、車山山頂のシンボルだった大きな車輪もない。道路は立派なハイウェイになっていて小屋の近くにバス停もある。ヒュッテも改築され、あの時は草原の中にあったが、今は木が成長して樹林の中、あの時の西部劇風の馬車もなくなっていて40年の時の流れを感じる。でも、あの時の写真を持って行っただので、受付で尋ねたら、「この子が僕です」とのこと。いいおじさんになっておられたが、跡を継いでいる由、「親父もおります」とのことでお会いする。40年ぶりの再会、本当に懐かしかった。初めてお名前を伺う。「手塚宗求様(てずかむねやす様)、1956年24才でこのヒュッテを創設され、現在もお元気でご活躍中、勿論日本山岳会会員、スキー連盟指導員や日本ペンクラブ会員として、著作や作詞もなさっている。いろいろ話合い、古い写真をも喜んで頂いた。美味しいケーキとコーヒーもあり、至福の一時だった。永年の夢を叶え、2008年最高の思い出である。



昭和44年8月16日撮影



平成20年8月26日撮影

コロポックルヒュッテの今と昔

八丈島の自然観察会

9 6 4 9 鶴 田 佐 知 子

リーダーに恵まれ、去年も沢山の山に登る事ができた。永谷さんの山窓ハイクで、九州の山のあちこちと、夏の特例で、28年ぶりに白馬三山に登ることが出来たし、緒方さんのガイドで北海道のトムラウシをはじめ、20年ぶりの立山の雄山、大汝山、そして上高地から涸沢までの紅葉散策など、楽しい1年だった。11月の北九州での全国支部懇談会では、全国の山岳会の仲間と楽しい時を過ごし、福智山へも久しぶりに登り、関西支部のNさんが我が家に二泊し、友情を温める事が出来た。

書きたいことは山ほどあるが、自然保護の川越尚子さんのお世話で、伊豆七島の八丈島に渡り自然観察することが出来た。熊本に住む私としては、なかなかできない企画だったので、3泊4日のこの旅を書きたいと思う。

2008年8月23日、22時30分、東京竹芝桟橋を船は出航した。10時間の船旅である。船は揺れることなく静かなので、毛布にくるまると、いつの間にか寝付いてしまった。24日、目を覚ますと騒々しい。いそいそ甲板に上がってみると5時50分、三宅島に着いた。ついで6時10分御蔵島、そして8時30分、八丈島に着いた。船をおりると宿の車が迎えに来ていて、数分後に飛行機組の待つ柳屋荘についた。前日から泊まっている人もいて全員19名、1年ぶりの再会だ。八丈島は伊豆諸島の最南端に位置し、四国の室戸岬や佐世保と同緯度にあるが、黒潮のためとかで無霜地帯、沖縄に似て亜熱帯植物が茂る温暖な島である。早速6台のタクシーで三原山へ。ぽつぽつ降り出した雨は、登山口に着いた頃はスコール、仕方がないので八丈植物公園に向かう。11時頃着き、ここのビジターセンターで岐阜支部の西条講師の講義を聞き、外に出て昼食。この頃には晴れてきたが、午後は植物園の散策となった。園内には赤紫の花を沢山付けたブーゲンビリアの大木が見事。ハチジョウススキ、ハチジョウシダ、ノシラン、オオバヤシャブシ、センダン、ハイビスカス、ハマボウ、トベラ、ヘゴ、オオタニワタリ、ヤブニッケ等々、沖縄を歩いているような感覚だ。沢山の木や花を楽しみ、17時頃宿に帰ってきた。その夜の夕食は、再会の喜びに話が弾み楽しかった。

24日、朝8時30分、バスは八丈富士に向かって出発した。昨日登れなかった三原山は、十数万年の古い歴史をもった複雑な地形だそうだが、今日登る八丈富士は約1万年前に噴火したと考えられている。8時50分登山口着。緩やかな階段が頂上まで続く。途中にタマアジサイらしき物が沢山、ここのはラセイタタマアジサイといって、葉がかなり厚い。頂上は854.3mで三等三角点だ。素晴らしい眺望、草原のような所もあり、お鉢巡りをする。八丈小島が海の中に浮かび可愛らしい。巡った後、全員で写真を撮り、お鉢の中の鳥居のあるところまで下ってみた。浅間神社の木の鳥居があり、石で出来た小さな祠の前で手を合わせた。お鉢に戻り、1280段の溶岩の階段を下った。

11時50分、車に乗りふれあい牧場に行き、のんびりとお弁当を頂いた。牧場には黒牛達がゆっくり草を食べていた。宿への帰りのバスで、川越さんの閉会の挨拶があり、午後の飛行機で発つ人は空港へ、もう一泊する人は3人だけで、午後はレンタカーを借り、地図を見ながら観光を楽しむことになった。江戸時代には1862人を数える人々を流罪にした流人の島だったと言うが、椰子の仲間らしい街路樹の間に色とりどりのハイビスカス、正に明るい南国だ。いろいろと素晴らしいところがある島のように、初めて訪れたのは、中の郷の黄八丈織元、黄、樺、黒の三色を使った格子や縦縞模様

のシンプルな美しさにはポーっとなってしまう。次に行ったのは大里地区の玉石垣のある大きな屋敷、浜から運んだという円い石で造られた石垣、沖縄の石垣はでこぼこしているが、ここの石垣はツルツルで丸く、一つの石を六個の石が囲むという六方積みと言うそうだ。石の種類も違うようだがよくわからない。そして地熱発電所を見学し、途中魚の刺身を買って、夕方宿に帰ってきた。夜は三人だけの静かな夕食だったが、再会を約しておしゃべりは楽しく暮れていった。

明けて 26 日、朝 6 時に起きて静かな海岸を散歩、朝食を済まして 9 時過ぎ宿の車で港へ。楽しかった八丈島ともお別れ、船は 10 時に港を離れた。14 時に三宅島、10 時間静かな海を走って 21 時、真っ暗な海の向こうに明かりのついた高層ビル群が立ち並ぶ竹芝桟橋に到着。楽しかった八丈の旅は終わった。

交通事故

1 4 5 5 9 加藤 百合子

病院の窓から見える風景は、梅日和も終わり、日射しも和らぎ、菜の花も見え、すっかり春うらのように感じます。

実は一月末、自宅近くで交通事故に遭ったのです。住宅の這入り口での出会い頭の事故で、双方の前方不注意からでした。私は自伝車、相手は軽自動車でした。

あの日、下り坂をゆっくりブレーキを掛けながら買い物から帰ってました。這入り口の所に車が停めてあります。(無断駐車です。)
「誰よ、こんな所に車を停めて」と思いながらも、少し下り坂です。そのまま、すうっと通り抜けようとしたとたん、車の陰から目の前に黒い物が見えました。ああっと叫び声をあげ、しまったと思った瞬間、身体が宙を舞ったように感じたところで気を失いました。脳震盪をおこしていたようです。「大丈夫ですか？」の声ではっと気がつき、もうろうとした意識の中で「大丈夫です。」と言いました。頭を打ったようです。頭が痛みます。すぐに救急車が来て「どこが痛いですか？」の問いにボーッとしながら「頭が痛い」と答えたようです。すぐに脳神経外科に運ばれました。MRI などの検査の結果、頭には異常ないとの事、良かった。頭には異常ないんだとホッとした途端、身体中が痛くて、特に左足が痛くて仕方がない。レントゲンの結果、左足を骨折している模様、土曜、日曜で病院はどこも休み、月曜日に整形外科に移りましょうという事で、応急処置のあと、二日間、脳神経外科のベッドの上で、痛みをこらえました。後で気がつきましたが、身体中あちこち紫色でした。整形外科に転院し、診断の結果、左足の二カ所不全骨折、一カ所は 10cm くらいのひび、一カ所は断裂でずれているとのことで、足をついてはだめ、体重をかけてはいけません。少しでも足をつこうものならヒーツというくらい痛いです。すごい腫れと内出血です。頭でなくて良かったのですが・・・。内出血の血は、二回抜かれました。血を抜いてもらっただけいぶん痛みが和らぎました。何日かたち、内出血と腫れが少しひいてからギブスがはめられました。それから一ヶ月が過ぎ、もう三月です。日にちが薬とといいますように、左足は上げたまま、右足だけの車椅子の不便な生活にも慣れてきました。主人や子供達が心配したのは、頭だったようです。何しろ、相手の車のボンネットに乗りフロントガラスは真っ白にひびいていたとか、その衝撃の強さは相当だったようです。頭を打ったダメージは、その後、顔は赤く膨れ二週間以上血圧も高く(下が 120 上が 190)で、

暫くは頭がボーッとしていて、始め頃に見舞いに来てもらった人は誰だったか、何を話したか思い出せません。でもタンコブ位で済んで、頭の方は問題ないようです。左足の骨折も順調のようで、相変わらず左足はつけられませんが右足だけの片足歩行のリハビリも始まりました。

先生や理学療法士の方からも言われました。「よくこのくらいで済んだねえー」と。ふだん、山登りしたり、グランドゴルフしたり、フラダンスしたりして、よく身体を動かし、よくあるいていたからでしょうか？今、こうしてペンを取ってる事が不思議で又、ありがたく思えます。しみじみ、ほんとにこれくらいで済んで良かったなあと、感謝しております。不幸中の幸いと受けとめ、今後、何事にもしっかり気をつけていかねばと、肝に銘じております。私が言うのも何ですが、いつ、どこで、何がおこるかわかりません。どうぞ、皆様もお気をつけ下さいますように。

永年、楽しみでやっているコーラスや、グランドゴルフの仲間の方々からも「早く良くなって出て来てよ」と、言われて励ましてもらっております。

元気になりましたら、又、皆様方と、色々楽しみたいと思っております。登りたいと思っております。それらを願いながら、日々リハビリにつとめております。(病院にて)

霧島山系のアザミについて (キリシマアザミ)

5120 石井久夫

アザミにはなぜ「とげ」あるのか？考えられるのは家畜や草食動物に食べられる機会が少なくなると進化したと思われる。アザミの仲間は、北は利尻島より南は石垣島まで(海岸から山頂まで)分布し、形態的に変異の幅が広くて種間雑種が多い。

世界には北半球の温帯から寒帯にかけて約300種が分布し、日本には約60種が生育しているが、日本産はほとんど特産種で、分類が非常に難しいと言われている。(根元から出ている根生葉が花の如く時期に枯れているか、青々と残っているかに注目して分類がなされている)

漢方にも利用されて脚気、神経痛、リュウマチ、利尿、健胃剤として8～10月に根を掘上げ、水洗いをして天日で乾燥し、煎じて飲む。アザミはペクトリナリン、キリシマリンなど生物に有害な紫外線を吸収するブラモノイド類を多量に含み、それが高山や海岸などの厳しい環境に広く生育している一因である。

南九州には特産のノマアザミがあるが霧島山系で今までツクシアザミと言っていたアザミが、ノマアザミではないかと混同されていたりして、名前が確定されずアザミの名前が不定であった。

つい最近、朝日新聞の宮崎版に取り上げられたアザミが新種であることが県総合博物館の調査で判明した。新たに見つかったと言うが、元々霧島で普通に見られたアザミが「キリシマアザミ」と命名された。キリシマアザミは、葉の生え方がツクシアザミと違うことに気づき染色体などを調べて新種と確認された。キリシマアザミの自生地は霧島連山と鰐塚山、高隈山の三カ所で、花の時期9～10月に根から葉がのびる点が従来のアザミと異なるのが特徴とされる。

アザミにまつわる話は沢山あるが、スコットランドの国花であるアザミでは茎の先端に紫色の頭花が群がって咲き、茎にとげのある翼があり、昔この国に攻めてきたデーン人の兵隊達がこのとげに刺されて敗走したといういい伝えから国花となった。

宮城県の金華山では、鹿がとげのない植物だけを食べて、アザミだけが残されていると聞いたが、霧島でもアザミは食べ残されているようである。乾燥地域にはとげのある植物が多く、草食動物に食べられないよう適応している。日本ではとげのある植物は少なく、とげのある植物ではアザミが一番なじみ深い。アザミの名は「本草和名」に大小薊根、和名「阿佐美」という昔から野生のアザミの若芽を食べていた。アイヌはチシマアザミの若葉や芽を魚と一緒に煮て食べていた。普通に味噌汁にアザミの若芽を入れて食べると、少々ほろ苦い味になるが、煮るととげは柔らかくなり香りがあるうまい。平安時代には、アザミを食用として栽培していた（延喜式に記述あり）。園芸植物としてのアザミは、日本では江戸時代にノアザミを改良して色々の花色ものを作出栽培、現代ではドイツアザミの名で栽培されているが、ドイツとは無関係で頭花の美しいマアザミなどを改良して切り花として栽培しているが、作りやすく生花として長持ちするので茶花として好適である。アザミ類の種子はその年のうちに播種すればよく発芽するし、日当たりの良い砂地に良くできるが連作を嫌う。根を食べる森アザミ（岐阜、長野、島根）はそれぞれ菊牛蒡、牛蒡あざみ、三瓶牛蒡といって商品化されている。

アザミの仲間といえば、九州とくに阿蘇地方に多いヒゴタイの名が浮かぶ。ヒゴタイの名前は江戸前期の本草学者「貝原益軒」の「大和本草」1709年によると「平行帯」（ひんごたい）から来たという説があり、中国では仲間を「監刺頭」と言われている。

ヒゴタイの花は不思議な形をして、やわらかな紫色の鞠のような形をしているが、不用意に触れると痛い。花の構造が普通のキク科の物とは違う。キク科の花は頭花といって小さな小花の集まりであるが、ヒゴタイは小花のようにみえるひとつひとつが頭花で、その総包片が硬い鋭い針になって、更に頭花の基部には刺毛とか基毛という細いとげが生えている。

キク科の花とは、頭花が一つの花である点が違って、更に冠毛が小さい鱗片状でタンポポのように風散布ができず熟しても総包の中にとどまり総包とともに落下する。キク科の植物は大体種子は風散布であるが、ヒゴタイは変わりものである。本州四国に分布するが、隔離的で九州には普通に分布する。園芸種にルリタマアザミがあるが、日本のヒゴタイとは違って葉の裏の葉脈が白くて区別できる。ルリタマアザミはヨーロッパから西アジアにかけて分布生育してウラジロヒゴタイと呼ばれている。

【メモ】

1, アザミ *Cirsium Japonicum*

多くのアザミは夏から秋にかけて花を咲かせるが、ノアザミは春から咲いて名の通り野原や田畑の畦に生え、本州、四国、九州から台湾、中国、朝鮮半島、ロシア極東地方に分布する。頭花は直径3～4cm、淡い紅紫色。ときには白色品種がある。昆虫が訪れると筒状の花の系は通常のひだ状態であるが、機械的な刺激があると、バネのように縮んで雄しべは引き下げられ雌しべの先に生えているブラシ状の毛が花粉を外にかき出す。このようにして花粉がモコモコとわきだし訪花生の昆虫に付着して自花受粉をさせている。

2, ヒゴタイ *Echinops Setifens*

属名のエキノプスは「ウニあるいはハリネズミに似たもの」を意味し、紫色の球状の花。沢山の花が咲き乱れる草原で異彩をはなつ。かつて九州ではよくみられ、盆花にもされたが、今では野生はごく限られた場所に僅かに残るだけで、探すのが困難で、本州・四国ではほとんど見つからない。草地開発の影響を受けて絶滅危惧種である。花序の直径は約5cmほどである。

・・・参考文献 朝日百科【世界の植物】 朝日新聞社 ・・・

錆びたピッケル

9 3 2 8 川 端 浩 文

毎年冬山登山として久住山や涌蓋山を選び、友人や家族等と山行を繰り返した来た。しかし、いつのころからかパツタリと途絶えた。近年は今年こそ再開しようと思うばかりで実現に至らなかった。理由は加齢による体力の衰えで自信がなくなったことや、車の買い換えでタイヤチェーンのサイズがその都度変わり、持ち合わせのチェーンが使えなくなったことである。

この冬はひょっとした話題から長男に励まされ、久し振りに彼と久住山へ冬山登山に挑戦する羽目になった。途中道路は雪や氷結で登山口まで行けないのではないかと心配したり、かつて雪道で事故を起こしたことがあって、いやなトラウマに悩まされ行きたくもあり行きたくもなしの心境になった。二月一日（日）山行決定。準備に手間取り自宅を出発したのが九時。牧ノ戸峠十時四十分着。北風の強い曇天で沓掛峠はマイナス一度。冬真っ盛り。それでも駐車場はほぼ満車状態。子ども連れの観光客や冬山装備をした登山客で賑やかだった。我々二人はやや見劣見劣りのする服装のうえ、杖代わりにカメラ用の一脚やピッケル持参で目立つ存在になった。霧氷、樹氷のトンネルをくぐり期待通りの冬景色。久し振りに見る絶景にみとれ、あちこちに立ち止まり歩行時間より撮影時間のほうが長くなった。星生山の辺りまで来た所で午後一時となり登山続行を断念。星生山山麓の湿地帯まで下ることにした。途中で遭難碑に出会う。丁度この時期の遭難であることがわかり身の引き締まる思いがした。かつて、同じ冬山の久住山へ登山中「危ないから下山した方がいいですよ」とアドバイスもらったことがあったことを思い出した。久住山も季節と天気次第で魔の山となる。湧水部分を除いて一面結氷し厚さ四～五センチになっていた。久住山には数十年にわたり数多く登った。その都度色々な体験ができて何度登っても飽きの来ない名山である。今回は登頂こそ出来なかったが冬山登山の醍醐味を存分に味わうことが出来た。

二男が今回の山行に触発されて自分も行きたいと言い出し再度二月七日（土）に登山することになった。図らずも一週間内に二度も久住詣で。運悪く暖冬で雪はすっかり解け道は泥んこ状態で僅かに霧氷が所々に付いていただけだった。しかし、期待して久住中岳直下の御池まで行くことにした。最近テレビで見たこの池の御神渡りを観察できるかと思って。一面結氷して午後の太陽を浴びて光り輝いていたが御神渡りはなかった。犬連れの登山客が童心に返って氷上で戯れているのが印象的だった。翌日泥だらけの靴の処置に悪戦苦闘したが御池の絶景を見たり撮影も出来たので収支は釣り合ったことにしよう。

今回二度ピッケルを使つた。思えば1979年初めて海外登山へ行行った時シャモニで買ったフランス製シモンは、翌年の1980年旧文部省主催の高校教師対象の登山指導者講習会で滑落停止の実地訓練で使って以来お蔵入りしていた。久し振りに取り出して見ると革のカバーはカビだらけでストッパーのゴム部分は風化気味。ブレードやピックも錆びていた。今回の冬山登山にピッケルは大げさだったかもしれないがとても役に立った。これからはもっと愛用しようと思っているがもう遅いかな？



「継続は力」

10390 阿 南 誠 志

「継続は力」先輩登山者に敬服することが多くあります。日本山岳会熊本県支部の50年も先輩たちの継続です。熊本県登山者を育て「安全登山」の牽引者の役割を担ってこられました先輩たちのおかげで現在、安全で楽しい登山が続けられています。ありがたく思います。

また熊本には「熊本アルコウ会」が創立76年と聞きます。熊本の登山界を生み育て現在も脈々と活動されていることに驚きとすばらしさに敬服します。

熊本市民の山「金峰山」には熊本アルコウ会や金峰会の方々が早朝から登られ最高登山者は6500回を超えられています。20年以上毎日のように金峰山登山をされていることから驚きです。

「健康第一」と言いますが健康の源は歩くことの実践でしょうか。

金峰山は身近に在って手軽な健康維持ハイキングの熊本市民の守護神のような山かもしれません。多くの先輩登山者が親しみ愛した金峰山を私たちも受け継ぎ、広く市民に親しんでもらいたいと願っています。



2009年3月8日 干支の山登山 福岡県「牛頸山」山頂にて

2007年・ヒマラヤ俳句日記・『ドルポ・カンテガ峰(6060m)の登山』

11771 加藤 功 一

大阪山の会西ネパール登山隊に参加し、その記録を「ヒマラヤ俳句日記」として、俳句と短歌でまとめました。
今回はドルポ(8月26日～9月30日)を掲載します。

1. 期間・行き先 【全期間 2007年8月22日～11月15日】
A : ドルポ (河口慧海の足跡を尋ねて、カテンガ峰 6060m の登山) 8月26日～9月30日
B : ブガンダキ(トレッキング・プーチェンガヒマール 6049m の登山) 10月7日～11月9日
2. 参加者 ドルポ: 大西 保隊長・水谷弘治・辻 一夫・入澤俊次・稲葉 香・加藤功一・加藤 明
ブリガンダキ: 大西 保隊長・水谷弘治・入澤俊次・稲葉 香・加藤功一・加藤 明
3. 行動記録 加藤功一の行動を中心に記載。

【第1部 ドルポ:カンテガ峰6060mの登山】

8月26日 曇り カトマンズ

出発に出し入れ多き吾が装備

8月27日 小雨 カトマンズ→ポカラ(空路) カトマンズ発 16:50 ポカラ着 17:20 トリスリホテル泊
ネパリーダンスを見ながら夕食

早朝の散歩の道に迷い果て
スクールに小屋の軒下借りもして
朝ラッシュ警笛懐かしカトマンズ
昼食を五つ星ホテルのハイアット

8月28日 曇り ポカラ→ジョムソン(空路) ポカラ発 7:30 ジョムソン着 7:55 スノーランドホテル
午前 装備の仕分け(ドルポへ持っていく物と、デポする物)
午後 休養 隊長より、乗馬について注意がある。

- ① 馬の手綱は常に握っておく(馬は跳ねたりけつまずいたりする)
- ② 馬上で居眠りしない(慣れてくると眠くなる)
- ③ 馬と仲良くなる(馬の特徴をつかむ)

雪山に雲のかかりて湖青し
秋雲に隠されて見えぬマチャプチャレ

(マチャプチャレ: 山名)

(ドルポ: 地名)

8月29日 曇りのち晴れ ジョムソン→パリヤック(3140m)
ジョムソン発 13:20
パリヤック着 16:20
今日からは馬に乗ってのトレッキングとなる

ジョムソンや雪山見えず気の晴れず
憧れし道ドルポ路へ鳥渡る
秋晴れのテントに夢ふくらめり

8月30日 曇りのち晴れ パリヤック→サンダ(3710m)

パリヤック発 7:13

サンダー着 17:00

1日中、馬に乗っていたので尻が痛くなった。村はずれの丘の上にテントを設営。村人がテントを覗きにきて、代表が「ダサイン祭があるのでカンパしてくれ」と云うので500ルピーカンパした。今度は婦人がきて「婦人会にもカンパしてくれ」と云うので200ルピーカンパした。(ダサイン:ネパール最大の祭)



子守婆テントを覗く秋の暮れ
パリヤックピンクに染まる蕎麦畑
秋雲にニルギリ峰の見え隠れ

8月31日 曇り・一時雨・のち晴れ サンダーで休養 加藤はターシントン方面へ散策 18:17~13:50

犬鷲の秋空高くサンダ村
秋の沢踏みいれば鳥の声
初秋の台地に大麦育ちをり

丘高く犬鷲カラスの攻防戦
水の秋沢消えゆ鳥の声

9月 1日 曇り サンダー→ キャンプ地(標高 3830m)

サンダー発 7:45

キャンプ地着 10:00

明日からターシントン偵察

(加藤功一・入沢)



放たれしヤギや牛の群霧に消ゆ

9月 2日 曇り・晴れ・雨 キャンプ地(橋)7:15 発→ペロルカルカ 14:30 着 (②班の記録)

今日から2班に別れての行動となる。

① トジ・ラーゲバ・ラ班・・・大西隊長・加藤明・稲葉(乗馬)

② ターシントン班・・・水谷・加藤功一・入沢(徒歩) ※ ②は河口慧海が辿ったルートを歩く

露けしや慧海の路の沢の音
慧海の仮寝のペロルカルカ星月夜
慧海寝しペロルカルカ吾も寝ん

月仰ぎ故郷を偲ぶターシントン
イラ草の香り嗅ぎ寝のペロルカルカ
露に濡れ寒さ震えるペロルカルカ

9月 3日 晴れ ペロルカルカ発 7:15→ヤクカルカ着 11:24 (②班の記録)

① 班と合流するまで徒歩、

② 合流後は乗馬 9:25 ①班と合流

慧海路の五千米で昼寝する

9月 4日 晴れ ヤクカメカ発 7:15→ツアルカ(4195m)着 15:00

沢の出会いの岩陰にブルーポピーが咲いていた。大西隊長や隊員は写真を撮る。私はスケッチをした。そこで昼寝をしていたら、馬方が「ブルーポピーがあったヨ」と、花を引き抜いて来たのにはびっくりした。たぶん彼は、私たちに自慢したかったのだろう。

ツアルカに着き、買物をして、スクールを見に行ったら、先生はチベットから来た。「カトマンズで日本人にチベット語を教えた」と言っていた。



一と日の疲れを癒す驢馬転げ

ブルーポピー慧海の路に出会いけり
幸運なブルーポピーをスケッチし
後で馬方抜き取り持てり

岩陰に気高く咲きしブルーポピー



9月 5日 晴れ一時雨 ツアルカ発 7:38→カジャン(4445m)着

モ・ラ 12:00(4850m) 雨が降り出しカッパを着る。眼鏡池で昼食、メ・ラ(5025m)から、少し歩いて降りた。チベット側から、ヤクのキャラバンが多い(荷物は米)

馬の背に乗りて安けき慧海路

9月 6日 曇り カジャン発 7:20→ティンキュー(4100m)着 14:13

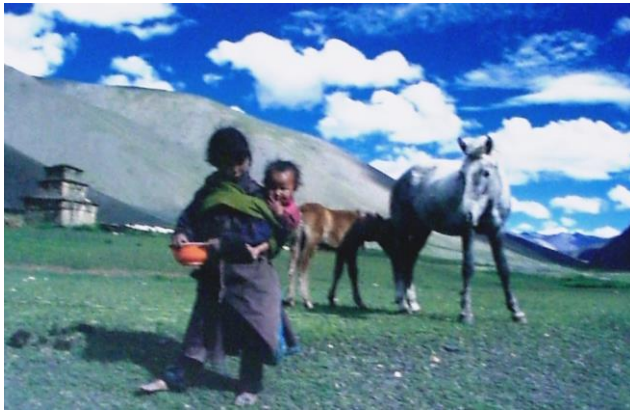
トラブル発生: 加藤功一だけ先に歩いたがそのままティンキューまで行ってしまったため(隊長にティンキューまで歩くと言っていなかった)「加藤が行方不明になった」ということで隊長とシェルパが探した。加藤は、そのことを本体から聞いて、後戻りして隊長を捜し、先に行ってしまったことをお詫びした。

ヒマラヤの慧海親し治茶畑
慧海路のペロルカルカに一人寝て
出し月見て故郷偲ぶ
秋の沢慧海懐かし白つつじ

9月 7日 晴れ ティンキュー 休養 河原で洗濯。日本にいるT氏に葉書を書き、俳句の添削を依頼する

秋の田の仏塔囲む麦畑
ボン経の仏塔多しティンキュー路
子らの手に鼻を持たせてヤク毛刈る

ティンキュー村人馬の道をバイク走る
農繁期子守かたてに麦を刈る
ティンキュー女弟背負い草を刈る



9月 8日 晴れ ティンキュー発 7:40→シーメン→キャンプ地(4130m)着 15:00

シーメンは通過したが、慧海が書いていたように、柳の木が多かった。シーメンからラン・ラへの道は、人が通らず悪い。

慧海見しシーメンの柳は今み

9月 9日 晴れ チャンゴゴース発 8:20→ニサル(3760m)着 16:35

ラン・ラ 9:45~10:26・・・南にあるピークへ登る(4935m)

ニサル路の犬驚飛べる天高し

9月10日 快晴 ニサル発 8:20→キャンプ地着 13:20

クン・ラへの道は広く開けており、ヤクによる隊商も多い、湖のキャンプ。



慧海のクン・ラ越に心はせ
夢に見しチベット入りに弾みけり

9月11日 晴れ キャンプ地→クン・ラ→ニサル

キャンプ地発 7:10 クン・ラ(5441m) 9:10~ 10:00

ニサル着 12:25

クン・ラは慧海が越えたと言われている所でネパールと中国との国境である。



慧海見しひょうたん池を吾も
見ん
ニサル村夜長を守るチベット
犬
夜のトイレ猛犬恐れテント出

9月12日 晴れ ニサル発 8:30→ラマ寺見物 9:30~

10:40~サルダン着 15:43

テントにて英語のレッスンサル
ダン児
寝もやらず草噛む驢馬の鈴の音



9月13日 快晴 サルダン→シェーゴンパ(4360m)

サルダン寺見物 8:30～9:30

セ・ラ(4505m) 10:35～11:30

シェーゴンパ着 16:55

サルダン寺見物後、裏にある薬局で
故障者の薬を購入



秋の丘慧海泊れしシェーゴンパ

慧海泊れしシェーゴンパ蕎麦う
るる

慧海の旅三年目のムクド見ゆ
麦畑に黄金に輝くサルダン寺
草紅葉ムクドの蕎麦に勝りけり
馬の足旅の疲れの見えて来し
見上げたる空に犬鷺秋の晴
降る星に星座たしかむ秋の夜
秋の暮谷間に潜むナムガン村
櫨紅葉ヤクの白毛によく映えて
急坂は馬のオナラで登り切る



9月14日 晴れ シェー聖山巡礼(水谷・加藤功・入澤・稲葉)

シェー発 8:10→仏岩 10:30(5110m)～コル 11:00

(5275m)～ ヤルマン・ラ(4915m)～シェー着 16:07

シェー聖山巡礼に、慧海は歩いて回ったようだが
私たちは馬で回ったがきつかった。

大西隊長:クワカンゴンパ見物

加藤 明:休養

聖山を馬の背たのみ巡礼す

草紅葉ナール飛はねシェー巡礼

シェー巡礼ひととき目立つパチュ
ンハム

シェーゴンパ河原のテントに一人

9月15日 晴れ シェーゴンパ 休養日

午後、スムドウゴンパ見物

シェーゴンパ囲む山里紅葉初む

9月16日 晴れ シェーゴンパ発 8:15→キャンプ地(4800m)着 15:35

9月17日 晴れ キャンプ地発 8:25→ツォ・ラ(5145m)10:55～11:40→キャンプ地着 16:13

みぞれあと朝日に輝く草紅葉

五千米馬22頭でキャラバンす

標高五千米脊を仰ぐ秋の雲

重荷の驢馬一と日終えたる転げダンス

一と月終えビール美味しドルポ旅

ヒマラヤの五千米に寝ころび峠のタルチ

9月18日 曇り キャンプ地発 7:35→ティンキュー着 14:10(4345m) 加藤功一だけ歩く・他は乗馬

昨夜半から雷雨で、テントに侵入しないか心配したが、朝方は雪となった。

秋雨にテントたたかれ夢破る

夜半の雪白装束に秋の草

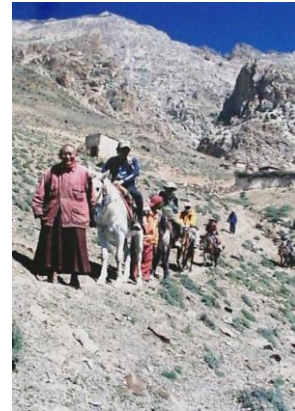
ヒマラヤの道辺に拾う塵ひとつ

草紅葉一夜のうちの雪化粧

朝日浴び光り輝く草紅葉

紅葉の岩だな険しヤクの群れ
秋雨に土こね遊ぶティンキュー児
秋うららマニ車回すラマの僧

巢穴から立上がり見るモルモット
弟背に草の実を採るティンキュー娘
薪背負い帰ってくる娘や秋深む



ヤギの群ダサインまでの命かな

隊長の口輪取り引くラマ

9月19日 曇り・晴れ・みぞれ ティンキュー発 8:15→カンテガ(4930m)着 14:00
カンテガBCは、広々とした草地で、登山予定のカンテガ峰が望める。

秋日に輝く麦畑テンキュー路
紅葉の斜面器用にヤクを追う

日和得て家族総出で麦を刈る
雪嶺のカンテガ峰見え黄麦畑

9月20日 曇り カンテガBC発 7:46 →ハイキャンプ地着 13:40(大西隊長・加藤功一・入澤)
ハイキャンプは、カンテガの雪壁の真下で、岩上に設けた。

ハイキャンプ登路の険しきカンテガ峰

一歩ごと頂上近づくカンテガ

9月21日 曇り ハイキャンプ発 6:15→カンテガ登頂(6060m)14:00→ハイキャンプ 15:50→BC着 19:10
カンテガの登路は雪壁で17ピッチのフィクスを行い、懸垂で下った。



雪面と格闘八時間カンテガ峰

9月22日 晴れ カンテガBCで休養(大西隊長・加藤功一・加藤明)
カンテガアタック(水谷・入澤・稲葉)、登頂後 16:30BC着

9月23日 晴れ 全員カンテガBCで休養

馬と人併せて四十ベースキャンプ
朝日射し輝く尾根にナール峰群

秋日和一と日を休む馬と人
天高し登頂の歎きベースキャン

9月24日 曇り・一時雨 カンテガBC発 8:45→ケラ・ラ(5525m) 10:10→ゼッケンコーラ出会(5075m)
→キャンプ地着 13:45

丘駈けるナールの群れや草紅葉
驢馬の鈴絶えることなき星月夜
ナールの群稜線走る速さかな

登りたるカンテガ峰に秋の月
秋草を夜通し喰むか馬や驢馬
驢馬隊に驚き駆け出すモルモット

9月25日 雪・晴れ・霰 キャンプ(カジャン分岐)発 9:00→ツアルカ着 15:00

ドルボ路を慧海尋ね一と月に明日は去る日いと寂し
ツアルカの校庭にテント馬・人四十見物人で大賑わい
秋の暮れテント覗くツアルカ児 山降りて酒買い走る飲み隊員

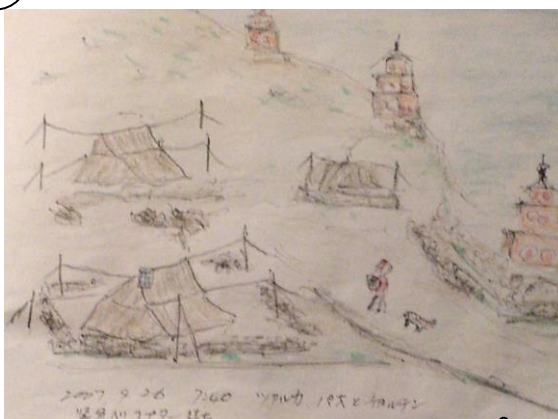
9月26日 晴れ ツアルカ (ヘリ待ち)

隊員の一人が高山病のため救助ヘリを依頼、ヘリを待つ。出発地の天候が悪く、ヘリは来なかった。夕方、イギリス人のトレッカーがテントを訪ねた。パーティー4人でネパールを西から東まで83日間で横断中とのこと。

つ
回
す
秋雨に救助ヘリ待つ高山病
ドルボ路は冬虫夏草で家が建
チベット犬夜のテントを吠え
ヘリ見ると生徒来なくて休校
秋の空見上げてひたにヘリを



朝寒し今日でお別れ馬や



秋の朝五時からラジオパオの家

秋の田のチョルテン囲み麦熟
るる
秋の風麦穂波打ち旗ゆるる
ドルボっ子テントに戯れ中覗
く
ヘリ飛ぶか秋空ながく見上げ
たる
ヒマラヤの秋風にのり雲いず
こ

9月27日 晴れ・夕刻雨（ヘリ待ち）

昨夜、イギリス隊のポーターが12時頃まで騒いでいたので、朝から大西隊長が抗議に行く。

児

朝の間に家族総出で麦を刈る
ツアルカ児麦わら背負ひ家路つく

ツアルカ村水栓あるが水は出ず
スケッチを群がり見入るツアルカ

先生が待てど来ないツアルカ校
ヘリの音耳を澄ませば秋の風

ボロ着ても心は清しドルボの児

9月28日 朝雨・晴れ・小雨 ヘリ待ち、ヘリは天候が悪く、ネパールガンジの途中から引き返した模様、明日はポカラから来るとのこと。今晚は学校の教室に泊めてもらう。



ドルボ路は馬上一と月別れ

ヘリ着かず馬・驢馬先に里帰り
馬方のどなる声無しなぜか寂し
驢馬の鈴今日でお別れ耳にあり
生徒来ず先生麦借りツアルカ校
秋雨に暗くなるまで麦を刈る
秋深し学校教室借りて寝る

9月29日 曇り・一時雨 ツアルカ ヘリ待ち

9月30日 曇り ツアルカ発 7:45→ポカラ→カトマンズ
待ちに待ったヘリがやっと来た。隊員、スタッフ、装備を載せポカラへ。
ポカラ着 8:25 発 11:00
カトマンズ着 11:38

ヘリの音麦刈り止めて駆け寄りぬ
ヘリの音思わず握手の5日ぶり
待ったヘリ秋風に乗リポカラ着

ヘリ待ち4日今日は来るかあけ明星
麦を刈る月の光の明るさに
ヘリ待ち4日朝明星に裏切られ
ヘリ待ち4日村の麦刈り今日終わり
ヘリ待ち4日村のスーパー買い占めた
ヘリ待ち4日隊員の志気まだ持つか

10月1日～6日まで、カトマンズで休養

4. ドルボ旅のまとめ

河口慧海の歩いた跡を訪ね、1ヶ月のドルボの旅を終えた。まず、言えることは、高度4000mから5000mの峠を幾つも越えるため、高度順応には厳しい条件であった。私は最初のサンダまでは少し頭が痛かったが、その後はうまく順応できた。高山病の影響が出た隊員もいた。結果的には辻氏の高山病で、ツアルカからポカラへヘリで帰った。その他、馬に乗って移動したが、毎日の行程が長いのと、4000mから5000mの高度があり、これまでのトレッキングで最も過酷な旅であった。

成果としては ① 河口慧海のルートを辿れた。 ② クン・ラを越えれた

③シェー聖山の巡礼が出来た。 ④ 目標の山「カンテガ峰(6060m)」に登頂できた。

会務報告 (2007～2009)

年別	月日	行事	場所	参加者
平成 19 年 (2007)	8.24	夏季例会・ビールパーティ 新入会友(8月 9 日入会) 中山昭一 新入会員(9 月 19 日入会) 会員番号 14459 田北芳博 新入会員(9月 21 日入会) 会員番号 14462 宇都宮信夫	居酒屋・蔵元 市銀座通	22
	10.14	小岱山下見登山	小岱山	14
	10.21	支部委員会	国際交流会館	6
	11.17	熊本支部設立 50 周年記念祝賀会	交通センターホテル	66
	～18	記念登山	小岱山	55
	12.9	森林保全巡視員現地講習会	金峰山	12
平成 20 年 (2008)	1.13	新年晩餐会・ゲスト吉村健児夫妻	交通センターホテル	29
	1.27	1 月山行例会・天草の山	次郎丸岳、太郎丸岳	11
	2.8	支部委員会	国際交流会館	8
	2.24	2 月山行例会	八方ヶ岳	14
	3.9	干支の山	鼠ヶ岩 鹿児島県出水市	12
	4.26	宮崎支部と交流登山	雁俣山	20
	～27	(美里町・ガーデンプレイス家族村で懇親会)	目丸山	23
	5.11	平成 20 年度支部総会	国際交流会館	25
	5.15	海外登山報告会	国際交流会館	27(うち支部関係 17)
	5.24	森林保全巡視登山	金峰山	7
	6.2	支部委員会	国際交流会館	8
	6.8	6 月例会・菊池水源の秘境を歩く	菊池水源一帯	17(うち支部関係 13)
	6.14	九州脊梁トレイルラン試走会	緑仙峡	5
	～15	(試走は雨天中止)		
	8.3	大木野徳敏氏逝去		
	8.23	夏季例会・ビールパーティ 新入会友(8月 23 日入会) 野田一郎	居酒屋・蔵元 市銀座通	23
	9.11	支部委員会	熊本市青少年センター	8
	9.27	第 1 回九州脊梁山地全山縦走登山	緑仙峡～小川岳～やまめの里	13(うち支部関係 11)
	～28	(九州脊梁トレイルランコース整備)	向坂山～三方山～遠見山	
	10.7	支部委員、写真展出品者合同会議	古町コミュニティーセンター	10
	10.12	九州脊梁山脈トレイルラン	向坂山～三方山	8
	～13	(大会運営に参加)		
	10.15	岩橋崇至山の世界Ⅱ写真展	鶴屋デパート	のべ入場者 6669
	～21	(山の道具展示に参加)		
	10.31	写真展出品者会合 新入会員(10 月 15 日入会) 会員番号 14558 田中朝子 会員番号 14559 加藤百合子 会員番号 14560 松岡栄治 会員番号 14561 松岡啓子	古町コミュニティーセンター	9
	11.3	金峰三山山岳マラソン大会 (大会運営に参加)	二ノ岳、三ノ岳	9
	11.13	第 1 回初心者登山教室・講義	国際交流会館	34(うち支部関係 18)
	11.16	〃 〃 実技 新入会友(11 月 21 日入会) 伊藤久善 新入会友(11 月 25 日入会) 西崎典子	鞍岳	33(うち支部関係 14)
	12.1	山の写真展	うえきの森 植木町	延べ入場者 約 370
	～15	支部会員 10 名が 30 点の作品を展示		

平成 21 年 (2009)	1.4 山の写真展 ～1.31 (うえきの森で展示された作品の再展示)	フードパル・ギャラリー 貢町	延べ入場者約1250
	1.17 新年晩餐会・ゲスト神崎副会長	熊本交通センターホテル	24
	1.26 支部委員会 新入会友(1月14日入会) 北里公子 新入会友(1月22日入会) 阪本 正 新入会友(1月31日入会) 井藤憲幸	古町コミュニティーセンター	8
	2.8 2月山行例会・天草の山	念珠岳	17
	2.12 森林保全巡視登山	金峰山	5
	3.8 千支の山	牛頸山 福岡県大野城市	20

支 部 規 約

(総 則)

第 1 条 支部は、日本山岳会熊本支部という。

第 2 条 支部は、事務所を熊本市におく。

(目的および事業)

第 3 条 支部は、山岳に関する研究、知識の普及および健全な登山の指導、奨励をなし、あわせて会員相互の連絡、懇親をはかることを目的とする。

第 4 条 支部は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 登山の指導、奨励に必要な集会などの開催
2. 会員相互の懇親をはかるために必要な事業
3. その他、目的を達成するために必要な事業

(会 員)

第 5 条 支部の会員は、次のとおりとする。

1. 熊本県内に在住する日本山岳会会員
2. その他の地域に在住する日本山岳会会員で、特に支部に入会を希望する者
但し、支部に入会を希望する者は、会員の紹介により支部委員会の承認を得るものとする。
3. 支部の目的に賛同するものを、会友とすることができる。

(役 員)

第 6 条 支部には、次の役員をおく。

1. 支部長 1 名
2. 委 員 若干名(内、常務委員 2 名以内)
3. 会計監事 1 名
4. 支部には、必要に応じて副支部長をおくことができる。

第 7 条 1. 委員および会計監事は、支部総会で支部会員の互選により選出する。

2. 委員は、互選により常務委員を選出する。

3. 支部長は、支部委員の互選により、支部会員の中より選任し、支部総会の承認を得る。

第 8 条 役員の任期は2年とし、重任を妨げない。

第 9 条 1. 支部長は、支部を代表する。

2. 副支部長は、支部長を補佐し、支部長に事故があるとき、または、欠員となったときは、その職務を代行する。

3. 常務委員は、支部長を補佐し、支部の事務に従事する。

4. 委員は、総会の決議にもとづき支部事業の企画、運営にあたる。

5. 会計監事は、支部の会計を監査する。

第 10 条 支部には、支部顧問若干名をおくことができる

1. 支部顧問は、支部総会の決議により、支部長がこれを委嘱する。

2. 支部顧問は、支部の運営について支部長の相談に応じ、助言する。

(会 議)

第 11 条 支部は、次の会議を行う。

1. 支部総会

2. 支部委員会

第 12 条 1. 支部総会は、毎年1回、会計年度終了後1ヶ月以内に支部長が招集する。

2. 臨時総会は、支部長または支部委員会が必要と認めたとき、いつでもこれを招集することができる。

3. 支部委員会は、必要に応じ支部長が招集する。

第 13 条 会議は、支部会員の2分の1以上の出席により成立する。但し、委任状を提出したものは出席者とみなす。

第 14 条 会議の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。その承認を受けなければならない。

第 15 条 次の事項は支部総会に提出して、その承認を受けなければならない。

1. 事業計画および収支予算に関する事項

2. 事業報告および収支予算に関する事項

3. その他支部委員会で必要と認めた事項

(会 計)

第 16 条 1. 支部の運営は、支部還元金、支部費及びその他の収入により行う。

2. 支部費は、年額2000円とする。但し、夫婦会員(会友)のいずれか一方は免除する。

第 17 条 支部の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

(解 散)

第 18 条 支部は支部会員の3分の2以上の同意により解散することができる。

(施行期日)

第 19 条 この規約は平成12年4月23日より施行する。

【編集後記】

- 支部報 18 号がどうにか出来上がりました。松本、工藤会員が編集を担当しましたが、私は、手書き原稿の一部を入力しただけで、ほとんどは松本会員の頑張りでこの会報は出来たようなものです。何名かの方から大作品をご投稿いただきましたが、印刷費の関係で全部を掲載出来ず、割愛させていただいた部分もありました。特に加藤功一様には、作品の前半部分のみで、第二部については次号に掲載することでご了解を頂き申し訳ありませんでした。第 17 号（支部設立 50 周年記念誌）で纏めた「支部年表」に誤字、脱字がかなりあり、今回追加、訂正をして 52 年間の熊本支部の歴史を再掲載しました。これが今後の正式な支部年表となります。次号では、多くの皆様のご投稿をお願いします。それぞれの皆様の体験、夢、感動、山行記録等は、会員同士の良き情報になり、刺激になります。この支部報がそのような役割を果たすことを願ってやみません。
- 加藤百合子会員が、1 月に自宅近くで交通事故に遭われ、現在入院中のとの事。病床からのご投稿も頂きました。日頃から明るく、活動的な百合子さん、病床で迎えられる桜の季節、さぞかし残念なことだろうと思います。支部員一同心からお見舞い申し上げます。自動車、自転車に乗る人も、歩く人も交通事故には気をつけましょう。昨年から熊本でも、山の遭難があいつぎました。昨年 6 月の洞ヶ岳での転落死亡事故、秋の国見岳周辺での道迷い、今年 2 月の鷲が峰での遭難、根子岳滑落事故、海外でも熊本の方がキリマンジャロで高山病死亡等、多発しています。山のベテランと自認する会員こそ、ここで安全登山の原点に返り山登りを続けてください。山の事故ほど悲惨なものはありません。
- 本田顧問から大木野徳敏さんのへ追悼文がありました。私も 40 年以上前から岳連山行の中で一緒にいる事がありましたが、正に豪放磊落な方でした。熊本支部の 1992 年、支部設立 35 周年記念カナディアン・ロッキー遠征隊にも参加されましたが、すでに持病も悪化しておられたようで、お酒も食欲も少なく強靱な昔の姿は何処にもありませんでした。あれから 16 年近くの闘病生活の苦しみいかばかりか。熊本登山界の伝説の人でした。・・・合掌〔文責工藤〕